思い出が見える丘

大樹の心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い出が見える丘

【Ｎコード】
Ｎ０６２７Ｙ

【作者名】
大樹の心

【あらすじ】
いつも失敗ばかりの小学６年生の男の子。その男の子や友達達の純粋すぎる『恋愛感情』や、ぶつかり合う『友達関係』を１年間に起こる様々な出来事や冒険で描くストーリー。給食・避難訓練・授業・登下校・夏休み・打ち上げ花火・運動会・卒業式・・・いろんな懐かしいエピソードに引き込まれます。難しく考えないで素直にのんびりゆったりほのぼの読み進めて下さい。うぶでくすぐったいテレのある恋愛と友情に『どきどき』や『感動』を味わえるはずです。

1、通学路

寝ぼけた頭・・・・髪の毛には寝癖がついている。ボーっとして目を開けるのもめんどくさい・・・・・・

カチャッ

家からでると、外には元気すぎる太陽が力いっぱいに輝いていた。今は朝の7：30、学校へ行く時間。楽しい事とか嫌な事・・・・・・いろんな事が始まる1日のスタートだ。僕は大きな伸びをしながらいつもの通学班の集合場所に目を向けてみた。そこにはもう友達のみんなが全員揃っていて、集合時間になってもこない僕の事を、いらいらしながら待っているのが見えた。

「ごめんごめん！遅れちゃった・・・・待った??（にが笑）」

いつも朝の集合に遅れてしまう僕。今日もいつも通りに、みんなの機嫌を取る得意のにが笑いで言った。それを聞いた通学班の班長、のぶ君が・・・

「遅いよ！きよちゃん！！もうずっと待ってるんだよ！！」

と少し怒りながら僕に言ってきた。

同じクラスののぶ君。僕にとって1番の親友だ。僕達2人は、「小学校生活のどんな時でも一緒にいた」と言えるくらいの仲良し。学校に行く時も一緒、授業の間の5分間休みも一緒。長い休み時間でも一緒だし、帰る時も一緒に帰る。もちろん学校が終わってから

も、2人で一緒に遊んでいた。のぶ君は僕にとって一番大切な親友であって、僕の憧れの存在でもあった。

のぶ君はとにかく何でも得意。やる事全部で、いつも1番になっていた。どんな遊びをやる時も、どんなスポーツをやる時も、もちろん勉強でもいつもいつも僕より上手だった。必ず1番がのぶ君で、2番が僕。小学6年になるまでのこの5年間、ずっとそんな関係が続いている。もちろんそれは通学班でも同じ。僕がずっと憧れていた通学班の先頭を歩く班長、それもやっぱりのぶ君がなってしまった。おかげで僕は一番後ろを歩く副班長。いつまでたっても僕はのぶ君に勝てない。

前のほうで、いろんな子と話をしながら楽しそうに歩くのぶ君。僕は一番後ろで話し相手もいない。そんな暇が多い通学路を、僕はいつも下を見ながら歩く癖があった。
見るのは通学路と、僕の前を歩く2年生の女の子。僕はその女の子の足を、いつも見ながら歩いている。今日はスニーカー、昨日は革靴。雨の日は、赤い長靴を履いてくる。多分この子が一番好きな色は赤色だと思う。だって、傘や雨がっぱもいつも赤色を使っているから・・・・・・そんな事を考えながら歩く通学路は、僕にとってはまったく楽しくともなんともない、つまらない時間でしかなかった。

そんな通学路でも、1つだけ楽しみな場所がある。その場所は・・・・・・

・・・・・・富士山が見える丘・・・・・・

静岡から遠くはなれたこの場所。それでも静岡の日本一高い山、富士山を見る事ができるのだ。その小さな丘を通るのが、僕のたった

一つの楽しみ。今日みたいに天気がいい日は、特にきれいな富士山を見る事ができる。

「ねえ見てよ！！すごくきれいだよ！」

その丘に着くと一番先頭ののぶ君が、みんなよりも早くそのきれいすぎる富士山を見て指をさしながら叫んだ。

「うわ～ほんとだ・・・・すごーい」

みんなもどんどんその富士山に驚いていく。一番後ろの僕が遅れて見ると、そこには朝の太陽と大きな富士山が、遠くのほうできれいに輝いていた。

「・・・・・・・・・ふ～・・・・・・・・・・」

僕はその富士山を見ながら、朝の冷たい空気を大きく吸い込んで深呼吸をした。

（・・・・もしかしたら今日は、いい事があるのかも・・・・・・・・）

なぜだかきれいな富士山が見えた時はいつもいい事が起こりそうな気がした。久しぶりに見たきれいな富士山。僕はきれいすぎる富士山を見て少しの期待をした。

まだ冬の寒さが残る小学６年生を迎えたばかりの４月・・・・いつもの今日が始まった。楽しい小学校・・・・・・・・長い長い一日が始まったのだ・・・・・・

2、朝の会

「きりつ！れい・・・・」

「おはようございます！！」

「ちゃくせき！」

朝の会が始まった。この授業の前とか終わった後に言う号令。号令はいつも日直がやる事になっていた。黒板の右下に書いてある今日の日直・・・・その日直当番は、お調子者のたけちゃんと、僕の大好きな綾ちゃんだ。

お調子者のたけちゃん。たけちゃんはいつもバカな動きやダンスでみんなを笑わしている。僕のクラスのムードメイカー。天才的なギャグと表情でみんなの注目をいつも集めていた。

そして、その隣の席に座るのが綾ちゃん。綾ちゃんは僕の初恋の相手だ。とにかくかわいい。どの角度から見ても、どんな表情をしていてもとにかく綾ちゃんはかわいいのだ。授業中や休み時間中、僕はいつもその綾ちゃんをボーっと見てしまう癖があった。綾ちゃんを見ているだけで、すごく心がどきどきしてくる。幸せな気持ちになってくるのだ。そんな僕は、今日もいつも通りに綾ちゃんの日直姿を一人でボケーッと見続けた。

「どうしたの？きよ君！！」

僕の隣の席の五十嵐さんが、ボケーッとしている僕を見て心配そうに声をかけてきた。

「・・・・・あっ・・・・・うん・・・・・なっ・・・・・なんでもないよ・・・・・あはは」

僕は、見つめる目線を綾ちゃんから五十嵐さんに変えて、苦笑いで答えた。

だいたんで男っぽくて不細工な五十嵐さん。いつも僕はその五十嵐さんにバカにされたり、からかわれたりしていた。身長も僕よりぜんぜん大きい。迫力があって力強い五十嵐さんは、僕にとってちょっと怖い存在の女の子かな・・・・・・

「出席を取りまーす・・・・阿部君」

「はい！！！」

「飯田君」

「あ・・・はっ・・はい・・・・・」

先生の点呼が始まった。席替えをする前はその出席番号順に、「いちのかわ・にのかわ・さんのかわ・よんのかわ」に別れて前から座っていた。違うクラスでの呼び方は「一号車・二号車・三号車・四号車」だ。席替えは、2年ごとにクラス替えがあるから、クラスの変わらない6年生になった時にやったばっかり。おかげで僕はその怖い五十嵐さんの隣の席になってしまった。大好きな綾ちゃんの隣をゲットするチャンスはまだしばらくこない。僕は「さんのかわ」で綾ちゃんは「いちのかわ」。今はまだ、席が遠いけど、いつか必ず綾ちゃんの隣に座る事を僕はずっと夢に見ていた。

「・・・・・・白川君・・・・・白川　清正　君（しらかわ　きよまさ　くん）！！！」

そんな事を考えていた僕は、自分の出席になっていた事に気付かないで、ボケーッとまた綾ちゃんを見つめていた。

「・・・・？？あっ・・・・・はっ・・・・・・はいいい！！」

気付いた僕があわてて返事をすると、お調子者のたけちゃんが席を立ち僕を指さしながら・・・

「はっはっは！！なんだよぉ今の声！！へ～んなの！！」

と言って僕の声を大笑いでバカにした。それを聞いて、みんなも笑い出す。見ると綾ちゃんもそんな僕を見てクスクスクスクスかわいらしく笑っていた。そんなみんなを見ながら、僕はうつむいて赤くなることしかできなかった。朝から失敗で注目を集めてしまった僕。はずかしすぎて情けない失敗・・・・・・・

（やばい・・・綾ちゃんの僕へのイメージが悪くなる・・・・大好きな綾ちゃんに嫌われちゃうよ・・・・・・なんとかこの後、かっこいい所を見せていかないと・・・・・）

僕は心の中で、この失敗を取り戻す方法を必死で考え続けた。

3、笛のテスト

ピロォォ～・・・・ピィ～・・・・

いろんな所から笛の練習をする音が聞こえてくる。今は音楽室。音楽の授業が始まる前の5分間休みだ。

さっき（・・・・・・失敗を取り戻す方法は・・・・・）と心の中で考えていた。そして、次は笛のテスト。まったく練習をしていない苦手な笛のテストだ。

（・・・・・・・あ～あ・・・・・・・・）

僕は心の中でため息をついた。

今日はあんなにきれいな富士山を見る事ができた。もしかしたらいい事でもあるんじゃないかと少しの期待をした。それなのに、全部がどんどん悪いほうへ悪いほうへと進んでいっている。

（・・・・・・・笛のテストでの失敗・・・・・・）

僕はそのはずかしい失敗の姿を、頭の中で想像をした。

そしてついに音楽室に授業が始まるチャイムが大きく鳴り響きわたった。

・・・・・・・キーンコーンカーンコーン・・・・・・・

チャイムが鳴るとすぐに音楽の先生が教室に入ってきた。いつもは

長く感じるはずの5分間休み。遊んだり、友達と話したり、違う教室に行ったりしていろんな事ができていた。でもなんだか今回だけは、すごく短い5分間に感じる。もう授業が始まる時間になってしまった・・・・・

「はい！！今日は先週話した通り、笛のテストを行う日です。一人ずつ順番に前に出てきてもらい、笛を吹いていただきます！！」

「え～も～やるのぉお～！？」

みんなの不満な声が音楽室に響いた。それでももちろん先生は待ってくれない。

「はい！！！では阿部君から！前に来てください！！・・・・あっちょっと待って、たまには女の子から行きましょうかねぇ～」

「え゛～！！」

遊園地の絶叫マシーンに乗った時の悲鳴。それに似た叫び声で女子達が叫んだ。

（ふぅ～良かった・・・・女子からだから僕の順番はまだまだ先だ・・・）

自分の順番が少し遅くなって、ちょっとだけ気持ちが楽になる。

「はい！上手でしたね。よくできました。続きましては・・・・・・」

・・・・・・・・名前を呼ばれた子は、前に出てみんなが見守る

中、笛を演奏する。どんどんとその笛のテストが進んでいった。はじめは順番が遅くなって安心と思っていたけど順番を待っていると、その時間が長ければ長いほど逆に緊張が大きく辛くなってくる。僕はその緊張をごまかすために、音楽室に飾ってある額に入ったいろんな有名な音楽家の絵を見始めた。

なんだか不思議なその絵・・・・・・・いろんな表情のいろんな絵が飾ってある。何のために飾ってあるんだろう？顔を覚えて何かテストでもするのかな・・・・・・？僕はその絵が飾ってある理由がいつも気になっていた。

だいぶ前に、夕方の音楽室に入った事があった。その時見たその音楽家の絵達は、ものすごく不気味で、なんだか少し怖さを感じた事を覚えている。いつもは何気なく見ている絵。暗くなると動き出すんじゃないか・・・・そんな風に思えた。

「さて、次の順番は・・・・・渡辺　綾香さん！！」

（・・・・・・・・・？？）

気付くと笛のテストはもう綾ちゃんのところまで来ていた。

「はい・・・・・」

かわいい声での綾ちゃんの返事。

綾ちゃんは音楽がすごく得意。勉強もいつも上のほう。体育だけが少し苦手だった。みんなも綾ちゃんの得意教科が音楽だということを知っている。そんな綾ちゃんに注目が集まった・・・・・・みんなも期待をしているみたいだ。

ピィィィ～ピィロロ～・・・・・・・・・・予想通り、すごく上手。他の子よりぜんぜんうまい。

（なんで綾ちゃんはこんなにうまく吹けるんだ・・・・・いいな～綾ちゃんは・・・・）

そんな綾ちゃんを僕はうらやましく思った。

こんなにかわいくてきれいな声で、しかもやさしい綾ちゃん。多分、綾ちゃんの事を好きな男子は僕だけじゃないはずだ。好意を持っている男子が他にもいるはずだ。男子の間でアイドル的な存在の綾ちゃん。僕はその綾ちゃんを、他の男子に取られたくないといつも思っていた。

進んでいく笛のテスト、順番がお調子者のたけちゃんの番になった。

「えっ僕ですか？僕に吹かせるなんて・・・・いいんですか先生？お金取りますよ」

お調子者のたけちゃん。こんな時でも、みんなを笑わせるような事を言っている。そんなたけちゃんを見て、笑っているみんな。僕は笑いながら様子を確かめるように綾ちゃんのほうをチラッと見てみた。

たけちゃんと綾ちゃん、教室の席は隣だ。その2人を見ていると、くだらない事をするたけちゃんを見て、綾ちゃんはいつも楽しそうに笑っていた。仲のいい2人。この時もやっぱり綾ちゃんはそのたけちゃんを見て、素直な笑顔でかわいらしく笑っていた。

人気の綾ちゃん。多分、その綾ちゃんが好きな男子はたけちゃんだ。

2人のやり取りとか表情を見て、僕はいつもそう感じていた。

（あ～あ・・・・僕もあんな風におもしろくできればいいのになぁ～・・・・・・そうすれば綾ちゃんも、もしかしたら僕の事を好きになってくれるかもしれないのに・・・・・）

僕にないものを持っているたけちゃん。そんなたけちゃんを見て、僕は悔しい気持ちでいっぱいになった。

緊張もしないで余裕のたけちゃんだったけど、演奏を聞くとその笛はぜんぜんへたくそ。へたくそでもここまでバカができればまったく問題がないのだ。たけちゃんらしいや・・・・・・で終わってしまう。

（よし！今日は僕もみんなを笑わせるような事をやってみよう！！へたくそでも、おもしろければみんなは認めてくれるはずだ！！）

僕は緊張をしながらも、何か新しい事をしてやろうと強く思った。

「はい！！次は白川　清正君です！！」

（・・・・・・えっ！・・・・・・ぼっぼっぼっぼっ・・・・・・僕の番？？・・・・・）

順番がまわってきて、一気に緊張が高まってしまった。今さっき、（おもしろい事をやってやろう・・・・）と思ったはずなのに手が震えて、体も震えて、もうどうしようもない。

「白川君！！返事はどうしたの？？」

「ははぁっ・・・・はいいいい！」

声が裏返った。周りの友達が小さい声でクスクスクスクスと笑う・・・・・はずかしい。ふらふらと緊張の足取りで前まで行くと・・・・・

ピロォォ！ピロォロロォッ・・・・プィィィ！！・・・・・震えて音にならない。別におもしろい事をしようとしてそんな音を出したわけじゃない。でもその笛の音を聞いたみんなは、今度はさっきより大きめな声でクスクスクスクスと笑い出し始めた。

どんどんはずかしくなっていく僕。ついには顔まで真っ赤になってきた。

（くそぉぉぉ！！！もうどうにでもなれだ！！！！・・・・）

いきおいで吹いた笛。何とか全部を終わらせる事ができた。

「はい。次は緊張しないでできるようにね。さて次は・・・・」

もう頭の中は真っ白。席に戻り座るとそんな僕を見て、隣にいた五十嵐さんがいつもの低い小声で僕に言ってきた・・・・・・

「なにやってんのよきよ君！音が震えてぜんぜんだめだったわよ！！」

言われて得意の苦笑い。でも僕はその笛のテストが終わったというだけで、心の底からほっとしていた。

結局みんなを笑わせる所か、笑われるだけで終わってしまった笛の

テスト。多分みんなは、清正君らしいや・・・・・・と思っているんだろう。そう僕のイメージはいつもそんな感じ・・・・・

緊張しやすい清正君。頭が悪い清正君。何をやってもうまくいかない、そんなイメージの悪い小学生がこの僕なのだ。得意な科目は特になし。スポーツも普通。女の子と話すのはすごく苦手。気が弱くて情けない男の子。そんな僕の得意技は失敗。何かの発表とかで僕はいつも失敗ばかりをしていた。僕が失敗をすると、みんなはいつも冷たい目で僕を見つめる。「まただよ・・・・」といういやな冷たい目だ。そんな中で僕ができることは決まっていっつも「苦笑い」。毎日毎日そんな日々の繰り返しだ。人気がない目立たない失敗だらけの小学6年生。それがこの僕なのだ。

「はい！！全員終わりましたね！！それでは今日の音楽の授業はこれで終わりになります。次は20分休みです。みんな怪我をしないように遊んでくださいね！！」

音楽の先生がみんなに言った。

2時間目が終わってからやってくる、20分休み。長くて楽しい遊び時間だ。みんないろんな自分の楽しみ方でその時間を使う。教室で絵を描く子、友達と話す子、校庭で遊ぶ子、サッカーをする子、いろいろだ。僕はいつもその時間を使って、親友ののぶ君と校庭で遊んでいた。音楽の先生が言ったその20分休みという言葉を聞いて、僕はのぶ君と目と目を合わせた。そして目を輝かせながら、2人揃って大きくうなずく。2人で遊ぶという合図だ。僕達は教室にあるボールを取りに、走ってはいけない廊下をみんなよりも速く駆け抜けていった。

4、勝負の２０分休み

人気がない目立たない小学生。そんな僕にも、一つだけみんなの注目を集めるすごい事がある。それは・・・・・僕の親友がのぶ君という事だ。

クラスのアイドルが綾ちゃんなら、のぶ君はクラスの憧れのヒーローだ。かっこよくてリーダーシップがあってしっかり者ののぶ君。勉強もできてまじめで、しかもスポーツがものすごく万能。そんなのぶ君を、女子達はいつも憧れの目で見ている。僕の自慢の親友なのだ。

（いったいなんでのぶ君はきよ君なんかと仲がいいんだろう・・・・）

みんなはそんな風に思っているはずだ。その理由は僕とのぶ君が隣近所の幼馴染だから。僕はこんな人気がない僕と、いつも仲良くしてくれるのぶ君にすごく感謝をしていた。

そののぶ君と一緒に遊ぶ２０分休み、いっつもやっているのは人気がある「ドッジボール」だ。校庭に大きな四角い枠のコートを作る。そのコートでチームに分かれてボールをぶつけあうゲームだ。サッカーと違って、このゲームは女子達も一緒に遊んでいた。今日もいつも通りにチームを２つに分ける事になった。

「よーし行くよ・・・・・グッとパッ！！！」

のぶ君がそのチーム分けを仕切った。

チームを2つに分けたりする時にやるこのジャンケンみたいなやつ。これにはいろんな種類がある。僕の小学校ではこの「・・・・・グッとパッ！！・・・・・・・」というリズムを使っている。グーとパーでチーム分けをするのだ。でも隣の小学校では「・・・・・グーパージャス！！・・・・・・・」でチーム分けをしている。同じグーとパーなんだけど、そのリズムが違う。他にも「・・・・・グッとパー・・・・っで分かれましょっ！！・・・・・」とかいろんな種類がある。僕が知っている中で一番珍しかった分け方は・・・・・「・・・・・・グチグチグーチージャス！！・・・・・・・」だ。なんとグーとチョキでチーム分けをするのだ。初めやった時はビックリした。焦ってパーを出してしまってみんなにバカにされたりした。もしかしたら、ものすごい遠くの小学校では、もっと珍しいチーム分けの仕方をしているのかもしれない。なんだか僕は、そのいろんな種類のチーム分けがおもしろくて仕方がなかった。

さあ、今日も2つに分かれて対決だ。

（さてさて・・・今日の僕のチームはどんなチームだ・・・・・・強いチームかなぁ～？）

僕はそのチームのメンバーに目を向けてみた。見ると僕のチームには、何でもできる僕の親友、のぶ君が入っていた。のぶ君が1番で僕が2番。いつもはのぶ君に負けているけど、今日のドッジボールは一緒のチーム。なんだかすごく心強い。その他の僕のチームメンバーを見てみた。するとそこにはあの大好きな綾ちゃんが立っていた。もし綾ちゃんが当てられそうになった時、僕が助ける事ができたらどんなにかっこいいだろうか！！

今日はもう2回も失敗をしている僕。出席の時間と笛のテストだ。それを見て、綾ちゃんが僕の事を少し嫌ってしまったかもしれない。

僕はなんとかその失敗を取り戻そうと、この遊び時間の２０分休みに勝負をかけた。そして、その運命のドッジボールがスタートする。

（よ～し見てろよ・・・・絶対にかっこいい所を見せてやる・・・・・）

ばこっ！！！・・・・一瞬で散ってしまった僕。いつもはふざけているたけちゃんだけど、スポーツはすごく得意。あっけなくそのたけちゃんのボールで、僕は撃沈してしまった。

（くそ！！！何がかっこいい所だ！はずかしい！！）

結局簡単にやられてしまった僕。そんな情けない自分に、心の中で文句を言った。こうなったら後の頼りはのぶ君だけだ。

たけちゃんとのぶ君はクラスのスポーツライバルだ。どっちも本当に運動神経がいい。いつもいい勝負をする２人に、みんなの注目が集まったりする。僕と違ってかっこよく目立てる２人。僕は、そんな２人がすごくうらやましかった。

（あっ綾ちゃんが狙われている！！）

狙っているのは普段は仲がいい、あのお調子者のたけちゃんだ。

「ちょっとたけ君！なんで私ばっかり狙うの～・・・・狙わないでよ！！」

「へっへぇぇ～いやだねぇ～！それ！！！」

（・・・くそったけちゃんめ！！綾ちゃんばかり狙って・・・・い

つもはあんなに仲がいいくせに・・・・）

そんな風にも思ったけど、なんだかそんな2人の関係が少しうらやましくも感じた。

（あっ・・・・・）

気付くと、たけちゃんの鋭いボールが綾ちゃんめがけて飛んでいる！！・・・・・・

ばん！！

見事にボールを取ったのは・・・・・・スポーツ万能の、のぶ君だ！

（よしさすがだのぶ君！！僕の親友だぞ！！）

自分の活躍じゃないのに、のぶ君の好プレーを見て僕は心の中でえばった。そしてここから、僕とのぶ君の攻撃が始まる。

「行くよ！きよちゃん！！」

のぶ君から外野の僕にパスが回ってきた。最強コンビでたけちゃんやっつけてやる！まずは、何度も何度もパスを繰り返す！タイミングをはかっているのだ。いつもならそのままいいタイミングでのぶ君が相手をやっつける！！そんな展開だ。でも今日の僕はいつもと違う！！ここまでの失敗を取り戻すために、自分からどんどんせめていってやる！！標的はもちろん綾ちゃんをいじめた悪者のたけちゃんだ！！正義のヒーローがこの僕だ！！

（見てろよたけちゃん・・・・・・）

と思ったその時、低めのパスがのぶ君から飛んできた。素早くそのボールを僕が取った！あわてて足を滑らせるたけちゃん！！そこで転んだたけちゃんが一言・・・・・

「あっやべぇ・・・・」

今がチャンスだ！！！今日一番の見せ所！！かっこよくたけちゃんをやっつけてやる！！力いっぱいたけちゃんに向かって投げたボール！！

「くらえぇぇぇぇっ！！」

ボールは見事に・・・・・・校庭を力強く弾んだ。

「あれっ・・・・」

「なにやってんだよ！！きよちゃん！！」

それを見てのぶ君が僕に怒鳴った。やっぱり僕はいつもだめ男だ・・・・・

「あっやばい！時間だよ！！」

時計を見たたけちゃんが、みんなに向かって言った。校庭に響き渡る授業開始のチャイム。次の授業が始まってしまう。僕達は校庭を砂ぼこりいっぱいにしながら駆け足で教室に戻った。

結局、この２０分休みでも綾ちゃんにかっこいい所を見せる事ができなかった。頑張って逆に失敗を重ねてしまった。僕の心の中は情

けなさだけで、いっぱいになっていた。

5、教科書の読み

何をやってもだめな僕。結局、それは遊び時間の２０分休みでも同じだった。次の授業は社会、今は歴史をやっている。

社会の歴史はちょっと難しく感じたりもするけど、おもしろく感じる時もある内容が多い。いろんな昔の歴史上の人物。そんなすごい人のすごい話を聞いていると・・・

（かっこいいな～）

とか思う時がある。

社会だけじゃなくて国語の教科書なんかもすごくおもしろい。特に国語で僕が好きな話、それは「スイミー」だ。小さい魚がいっぱい集まって大きな魚を驚かせる話。なんだかその世界にすんなり入れてすごく楽しい話だ。その他にも「ちいちゃんのかげおくり」とかすごく楽しい話が多い。

だけどそんなおもしろく感じる社会や国語なのに、授業中だとぜんぜんつまらない。なぜなら、その教科書をみんなの前で読む時があるからだ。

出席番号順にまわってくるその順番。指されて立たされて、その教科書を読む。読み書きが苦手な僕にとっては、その教科書を読むというのがすごく苦手。しかも僕はあがりしょうの小心者だ。そんな僕が恥をかく一番のタイミング、それがその音読なのだ。

僕が読む時はいつも声が震えてどうしようもなくなってしまう。し

かも、わからない漢字がある時は、途中で止まって言葉に詰まる。そして小さな声で隣の席の五十嵐さんにその読み方を聞いたりする。

「ねー・・・・・ここなんて読むの??」

それを聞いた五十嵐さんは、みんなに聞こえる大きな声でその読み方を言ってしまう。

「その字は冷静よ!!れいせい!!!」

そうすると、みんながまた冷たい目で僕を見る。

（・・・・そんな漢字も読めないのかよ・・・・・・）

という冷たい目だ。はずかしい。

僕と違ってそれが得意な人の読みを聞いていると、なんだかすごく聞きやすくてその内容がものすごく伝わってくる。国語や社会の読み。クラスで一番聞きやすいのは、やっぱり綾ちゃん。きれいな声ですらすら読んでく。しかもものすごくかわいらしい読み方。

男子の中では、のぶ君。感情表現も入っていて、なんだかかっこいい読み方だ。逆に、すごく下手に感じる人・・・それは、僕と同じあがりしょうで小心者の飯田君だ。

太っていて給食が大好きな飯田君。体育と勉強はほんとに苦手。しかもものすごく緊張しやすいのだ。そんな飯田君のもう一つの特徴が、不潔なイメージ。気を抜いているとすぐによだれをたらして、服にはいつもきたない汚れがこびりついている。机にも給食の汚れがついていて、しかも何日もそのまま。その汚れが乾燥していてカ

ピカピで汚らしい。だけど、そんな飯田君にも仲良くしてくれる親友が1人だけいた。それは、やせている無口な山田君だ。

まったく目立たない地味すぎる山田君。見た目は細くて身長だけはやたらでかい。そんなでかいのに目立たないのだ。僕はその山田君の声を聞いた事がほとんどない。とにかく無口。もしかしたら一日中しゃべらない時もあったりするんじゃないか??と思ったりするくらいだ。

2人は地味でかっこ悪い、クラスでもレベルが低いデブヤセのでこぼこコンビだ。僕はいつもそんな人気がない2人とあまり仲良くしすぎない努力をしていた。だけど・・・・・僕が何かの発表とかで失敗をすると、その授業が終わった後、飯田君は必ず笑顔でやさしく僕に話しかけてくれた。多分同じ匂いがするんだと思う。僕の失敗にやさしくフォローを入れてくれる。うれしいような、哀しいような・・・・僕はそんな複雑な気持ちをいつも味わっていた。

「はい、では飯田君。次からの文章を読んで下さい。」

「ははっはいぃぃぃ・・・」

その飯田君が、ここからの文章を読むらしい。こんな時、同じ辛さを知っている僕は飯田君を心の中でいつも応援をしている。

（よ〜し・・・・失敗するなよ・・・・漢字は大丈夫かな・・・）

飯田君が読む文章を、先に目で追って読んでいく。今回は難しい漢字はなさそうだ。

（大丈夫だぞ！飯田君！！後は緊張しなければいけるよ！！がんばれ！飯田君！！）

そしてついに飯田君の読みが始まった・・・・・・

「・・・・・そっ・・・その・・・よ・・・よくとし・・・・えっ翌年であってるよね？あっとっ徳川　いっいえやす？・・は・・・・」

（・・・やっぱり緊張で文章がめちゃくちゃだ・・・・あ～あ・・・・可哀想に・・・・）

いつもこの飯田君の順番が回ってくると、僕もその読みの準備を始める。名前の順でいくと、僕はその飯田君の１０回後に順番が回ってくる。前もってだいたい１０回先の文章を見て漢字に読み仮名をふっておく。

（・・・・よーし！これで準備万端！！いつでもかかってこいだ！！後は緊張さえしなければぜんぜん楽に読めるぞ！！）

今日もその読みの準備をして、気合を入れてその順番を待った。

キーンコーンカーンコーン

（・・・・・あれれれ！？せっかく読み仮名までふって気合入れて待っていたのに・・・・）

僕の順番は回ってこないで、その社会の授業は終わってしまった。でも成功もなくなったけど失敗もなくなったので、本当はすごくほっとしていた。

「はい！！今日の社会の授業はこれでおしまい。次は給食の時間で

す。みんなあわてないで準備をしてくださいね！！」

「きりつ・・・れい」

「ちゃくせき！！」

授業が終わると僕はすぐに飯田君のところに行って、やさしくさっきの失敗を忘れる話をしてあげた・・・・・・・

6、給食でのお願い

やってきた！！給食の時間！！しかも今日の献立は僕の大好きなあげパンだ！！一か月分のメニューが載っている献立表。僕はそれを見ながら毎日毎日、このあげパンの日をすごーく楽しみにしていた。

今日の４時間目までは本当に辛かった、恥ずかしさの連続。出席に笛のテスト、それに２０分休みまで、ほんとに恥のかきまくりだ。でも終わってしまえばもうそれまで。友達も今は、もう僕の失敗を忘れているはずだ。給食着に着替えた僕はおぼんから順番に給食を取りにいった。

給食にはそれぞれ係りがいる。勝手に多く持っていったり、嫌いなものを持っていかなかったりしないように、その係りの人が平等に配っているのだ。今日も、おぼん・おわん・あげパン・野菜炒め・卵スープ・みかんの順番で給食係がいた。大好きなあげパンを配る係りの人・・・・・・・それはお調子者のたけちゃんだ。

「たけちゃん。悪いんだけどそっちの粉が固まってるあげパンのせてくれない・・・？」

甘い粉が大好きな僕は、小さめな声でたけちゃんにお願いをしてみた。するとたけちゃんは・・・・・・

「笛のテストがへたくそなやつの言う事なんか聞きたくな～いねぇ！」

と嫌な笑顔で言ってきた。

（・・・・なんだよたけちゃん！！いじわるだな！！！しっかりさっきのテストのこと覚えていやがった！！くそっ！自分だってぜんぜんへたくそだったくせに！！・・・・・・）

僕が、意地悪なたけちゃんの事を細めで睨んでいると、たけちゃんは・・・・・・

「そんな目で見ないでよ！！みんなのわがままなんか聞いていられな～いの！こっちだって係りなんだからさぁ！」

と言って粉の少ない普通のあげパンを、雑に僕のおぼんに乗っけた。

たけちゃんは変に意地悪な所がある。悪気はないのかもしれないけど、意地悪に感じてしまう時があるのだ。僕はなんだかそんなたけちゃんが少し嫌いだった。それさえなければおもしろいだけのいい友達なのに・・・・・

「はい。みんな準備はいいですか？・・・では。いただきますをしますよ・・・はい！いただきます！！」

「いただきます！！」

まあとにかく、おいしくて楽しいみんなの給食が始まった。

給食が始まると、すぐにいろんなみんながあげパンのところに集まりだした。余ったあげパンを取りに行ったのだ。もちろんその全員があげパンをもらえるわけじゃない、数には限りがある。そのあげパンをもらうにはジャンケンで勝たないとだめなのだ。僕も急いでみんなのところに行ってそのジャンケンに参加をした。

「よーし行くよ・・・・・ジャンケンポイ!!」

みんなで口を揃えてジャンケン開始!結局1回目を勝ち残ったのは、僕を入れた4人だけだった。その勝ち残りメンバーは・・・・僕・のぶ君・五十嵐さん・理沙子ちゃんだ。だけど、残っているあげパンは2つ。まだ全員がもらえるわけじゃない。もう1回ジャンケンで勝たないとならない。

「くっそぉぉぉ!!絶対食べたかったのにぃぃぃ・・・・・・」

ジャンケンに負けた給食好きの飯田君が、ものすごい力の入った表情で悔しがった。

「はっはっはっ!ごめんね飯田君!でももう1回ジャンケンしなきゃだめなのか・・・・・勝てるかな・・・・・あれっ?きよちゃんも残ってるの?これは負けられないな〜!!」

のぶ君が頭をかきながら言った。そんな事を言っているけど、あの笑顔さはいつも通りの勝ちを予想しているはずだ。その隣では五十嵐さんが興奮しながらジャンケンを手で占っている。

「ふぅぅ〜ふぅぅ〜・・・・絶対に負けない!!」

手と手を絡むように組んでひっくり返し、そのすき間を片目で見る。何が見えるのかわからないけど、なんだかジャンケン占いらしい。男にも負けないくらい大きな五十嵐さんは、占いなんかしなくてもなんだかジャンケンが強そうに思えた。僕の横には理沙子ちゃんがいる。

「どうしよう？昨日は負けたから今日は勝ちたいなぁ～・・・・」

クラスでは1番大人っぽい理沙子ちゃん。すごくませていて、いつも恋愛話を女友達と話している。豪快で大胆な所もあったりするけど、五十嵐さんのそれとはまったく違う。五十嵐さんみたいに男っぽいと言うよりはリーダーシップがあって、積極的。そんな所が豪快で大胆に感じるのだ。そんな理沙子ちゃんは僕とはあまり話をしたことがない、少し遠い存在に感じる女の子。

「よ～し！いくぞ～！ジャーンケ～ンぽい！！」

のぶ君の声にあわせてジャンケンが始まった。結果は・・・・・僕はグー。五十嵐さんもグー。残りののぶ君と理沙子ちゃんは・・・手を大きく開いたパーだった。

「やった～！俺の勝ち！！」

のぶ君が大喜びをした。のぶ君に負けるのはわかっていた。いつも勝てないのぶ君だから・・・でも余っていたあげパンは2つ。なんとかもう1つのあげパンを食べたかった。

（・・・・あ～あ・・・残念だな・・・・・・）

僕が悔しい顔をしていると、隣にいた理沙子ちゃんが・・・・・

「なんか勝ったけどあんまり食べたくないなぁ～・・・・きよ君。あげパンあげる。」

その言葉を聞いて、僕は少し驚きながら答えた。

「・・・・えっ・・・いいの？せっかく勝ったのに・・・」

すると理沙子ちゃんが、首をかしげて少し悩んでから僕に言った。

「う～ん。別にいいや！！気にしないで！」

（・・・・・やったぁぁラッキー！！負けたのにあげパンゲットだ！！うれしいな♪！）

僕が興奮をしながら喜んでいると、あげパンをくれた理沙子ちゃんが僕に一歩近づき、言いづらそうに小声で話しかけてきた。

「・・・・そのかわり、後でお願いがあるんだけど聞いてくれる？」

（・・・・・・・お願い？いったいなんだろう。まあ、お願いだかがなんだか知らないけど、あげパンが食べられればなんでもいいか。）

そう思った僕は理沙子ちゃんに・・・・・

「いいよ！何でも言って！！」

と大きな声で返事を返した。

「ちょっとぉ～！あげるなら私にちょうだいよぉぉぉぉ！！」

ジャンケン占いまでしたのに負けてしまった五十嵐さんが、ものすごく悔しそうな顔でどたどたと足踏みをする。

（こんな時は逃げるが勝ちだ！さっさと席に戻ってあげパンを食べ

てしまおう！♪）

僕は自分の席に着くと急いでそのあげパンを食べ始めた。すると・・・・・

「やぁぁほぉぉ！！♪」

みかんカゴの前から大声が聞こえる・・・・見ると変な踊りをしながら叫ぶたけちゃんが。

「いえ～い！みかん３つゲットォォ！！」

あげパンに人気が集まって、みかんジャンケンにはぜんぜん人が集まらなかったみたいだ。少しうらやましくも思ったけど僕もあげパンをゲットしている。まあ今日の所はあげパンだけで我慢しよう。

おいしいあげパンだったけど２つ全部食べるのはさすがに辛い。おなかがいっぱいで少し余ってしまった。捨てるのももったいないからポケットに入っている小さいビニール袋にあげパンをしまっておいた。

家で食べる給食のパンはなぜだかすごくおいしく感じる。僕はその余ったあげパンを家に持って帰る事にした。家での楽しみが１つ増えた。袋にしまったあげパンを、机の引き出しの中に大切にしまった。

どんどんみんなが給食を食べ終わる。食べ終わったら食器の後片付けだ。牛乳パックは１人が上の部分を大きく開いて、残りのみんなのパックを２つ折りで詰め込む。給食の片付けにも係りが決められていた。僕はその牛乳係り。たまに友達の牛乳パックを僕が折り

たたむと、残った牛乳が飛び出して服とか手にかかったりする。少し気持ち悪くていやな係りだ。でも係りだからしょうがないか・・・・

7、図書室でのお昼休み

給食が終わってすぐにやってくる、２０分休みよりぜんぜん長いお昼休み。僕にとってこのお昼休みは大切な時間だ。

「きよちゃん！！またドッジボールやろうよ！！」

のぶ君が２０分休みの時みたいに、ボールを持って僕のほうにやってきた。

「・・・・ごめん、のぶ君。お昼休みはやめとくや・・・」

すごく楽しいドッジボール、だけどお昼はいつもやらない事にしている。なぜかというと、僕はお昼休みを別の楽しみに使っていたからだ。大切な僕の時間・・・・・・心を落ち着かせる事ができる大切な僕の場所・・・・・

静かで物音がしない部屋・・・・・・窓から入る陽の光が部屋いっぱいに広がって・・・・・・

すごく暖かくて・・・・・・すごくきれいで・・・・・

僕は昼休みに、必ずこの図書室へと来ていた。この図書室と言う場所は、なんだか他とは違う特別な雰囲気がある。心が温まる特別な雰囲気。僕はその雰囲気がすごく好きで、いつもいつも本を読みながら、外の景色とか周りのみんなを見て静かにその時間を使っていた。

（さて！！今日も昨日読んでいた本の続きを読もう！）

僕は昨日から見ている「日本の歴史３」を手に取った。

本当に読書が好きな人は、なんだか難しい本を読んだり厚めの小説を読んだりしている。でも僕は、そんな文字がいっぱいの本が好きなわけじゃなくて、この部屋の静かさと他の教室と違う雰囲気が好きなだけだ。だから読む本はいつもこの「日本の歴史」。中を開くと細かい字もいっぱいあるけど、途中におもしろい漫画があったりする。僕の目的はその漫画の部分。家で新聞を開いたりする。でも目的は４コマ漫画だけ。僕はこの歴史の本も、その新聞と同じ使い方をしていた。

「きよ君！！」

（・・・・・・？）

呼ばれて振り向くと奥にある図書室の入り口に誰かが立っているのが見えた。よく見るとその子は、さっき給食の時間にあげパンを僕にくれた理沙子ちゃんだった。

（あっそうだ！そういえばさっき、給食の時に何かお願いがあるって言っていたな・・・・そのお願いを言いにきたのかもしれない・・・・）

僕は席を取られないように本を開いて机の上に置いた。そしてすぐに理沙子ちゃんのほうに歩いて行く。

「理沙子ちゃんごめん。さっき言ってたお願いの事だよね。」

それを聞くと、理沙子ちゃんは・・・・

「うん。そうなんだけど・・・・・・・・」

そこまで言うと理沙子ちゃんは、なんだかはずかしそうにもじもじしながら下を向いてしまった。そして、少しの時間を置いた後、またその続きを話し始める。

「・・・・・・・・あのさ・・・・・・・・・・ここじゃぁ言えないから今日の帰りに話してもいい？・・・・・・」

なんだかいつもと雰囲気が違う理沙子ちゃん。いつもは他の子より大人っぽくてはきはきしているのに、今日は何だかすごく女の子らしい表情をしている。そんな理沙子ちゃんを見て、なんだか僕は少しどきどきしながら返事を返した。

「べっ・・・・・別にいいよ・・・・・・」

それを聞くと、理沙子ちゃんはうれしそうに答えた。

「・・・やった！！・・・・・・・それじゃあ・・・・今日一緒に帰ろ！」

・・・・・・帰りを誘われてすごく驚いたけど、すぐにＯＫと答えた。

（??理沙子ちゃんはいったいなんの話があるんだ?もしかして僕のことが好きなのかな??告白!??まさかね・・・・）

はじめ聞いた時はちょっとしたお願いだと思っていたけど、なんだか大切な事みたいで少しそのお願いが楽しみになってきた。

話も終わったので、席に戻って本の続きを見る事にした。「日本の歴史3」ももうすぐ終わり。今日中に次の歴史を読んでみたい。毎日毎日少しずつ進んでいくその内容が、僕にとってはすごく楽しみ。早く進めたいその内容。僕は漫画を読んでいるというより、目を通しているというスピードで、とにかく次から次へとページをめくりまくった。ふと時計を見ると、もうお昼休みになって20分近くもたっている。

「・・・・・・・遅いなぁ恵美ちゃん・・・・・」

独り言を言った。

僕がこの図書室に来る理由。本当は、特別な雰囲気や読書だけがその理由じゃなかった。そのもう一つの理由、それが隣のクラスの恵美ちゃんだ。

僕と同じく、必ずお昼休みに図書室へやってくる恵美ちゃん。メガネをかけてて無口でおとなしくて、内気な性格。もちろん趣味は読書だ。でも勉強がものすごくできるわけじゃなくて、レベル的には普通。運動はすごく苦手。背が小さくてかわいらしくてやさしい・・・・・・僕はそんな恵美ちゃんに会える図書室がすごく大好きだった。恵美ちゃんと一緒にいるとすごく心が癒される。嫌なことも悩みも全部忘れる事ができる。気持ちがいい雰囲気の図書室とやさしい恵美ちゃん。僕はその2つを感じられるお昼休みをとにかく楽しみにしていたのだ。

そんな恵美ちゃんは給食を食べるのが大の苦手だ。好き嫌いが多い恵美ちゃん。給食は必ず全部食べるのが学校のルールだ。食べるのが遅い子とか好き嫌いが多い子は、そのお昼休みの時間まで使って給食を食べさせられた。今日もその恵美ちゃんは、給食が長引いて

しまって図書室に来るのが遅れてしまっている。いつもなら１０分もたてば来るはずなのに、今日はまだ来ない。僕は少しその恵美ちゃんが心配になってきた。

「清正君・・・・・ごめん・・・待った？」

声を聞いて後ろを振り返ると、その心配をしていた恵美ちゃんがいつの間にか僕の真後ろに立っていた。

「あっ恵美ちゃん！遅かったね。心配したよ！どーしたの！？」

「うん。苦手な野菜炒めがあって・・・・・・・それで・・・・・・・」

「あっ・・・・・・そうだったんだ。それならしょうがないね！ほら早く本読まないと時間なくなっちゃうよ！」

恵美ちゃんがやってきて一安心。いろんな話をしながら、僕の大好きなお昼休みの時間を2人で仲良くいっぱい楽しんだ。

8、理沙子ちゃんとの下校

長すぎる一日。ほんとに今日は長かった。思い出してみると、今日は失敗がすごく多かった。まっそれはいつもの事だけど・・・・やっとその全部が終わって、今は帰りの下校道。朝来た道をそのまま戻る。今日も、のぶ君と一緒に帰ろうと思って元気にのぶ君を誘ってみた。するとのぶ君はすごく申し訳なさそうな顔をして・・・・・・

「ごめん！きよちゃん！今日は学級委員の仕事で学校に残らきゃいけないんだよね。」

と言って断られてしまった。今日は寂しく1人の帰り道。

校門を抜けると、さっきまでいっぱいいた下校の子達もいなくなってしまった。住宅街が並ぶ長い一本道、1人で寂しくとぼとぼ歩く。のんびり歩いていると、少し怒った言い方で僕を呼び止める声が聞こえた。

「きよ君！！・・・きよ君ちょっと待ってよ！！」

そこには僕のクラスの理沙子ちゃんが立っていた。

（・・・・・・・・あっそうだ！！今日は理沙子ちゃんと帰る約束をしてたんだっけ・・・・そういえば、お願いがあるとか言っていたな・・・・・・）

お昼休みにあれだけ念を押されて、それでもその事をまた忘れている僕。理沙子ちゃんが怒るのもわかる。

「ごめん。理沙子ちゃん。忘れて先に帰ってた・・・はっはっ・・・・・はっ・・・」

なるべく怒らせないように、その台詞を言ったつもりだった。それでも・・・・

「もー！きよ君、忘れないでよ！！」

やっぱりひどく怒られた。続けて不思議そうな顔で僕に聞いてきた。

「あれっ??今日、のぶ君は??」

それを聞かれた僕は・・・・・

「あ～今日は学級委員で学校に残らなきゃいけないんだって・・・・・それで一緒に帰れなかったんだよね。」

すると理沙子ちゃんは、なんだか寂しそうに・・・・・・

「へー・・・・そ～なんだ・・・」

と答えた。

恋愛話が好きで大人っぽい理沙子ちゃん。そんな理沙子ちゃんのお願いを、僕はすごく楽しみにしていた。それでも僕は焦らずに、なるべくその本題には触れないように、2人で楽しい下校を楽しむ事にした。

2人でいろんなくだらない話をしながら帰り道を楽しむ。帰りの坂

道、2人で競争。僕が勝って理沙子ちゃんをバカにする。その坂道が終わると今度は毛虫がいっぱいいる木がある。その木の下には毛虫の死骸がいっぱいあった。その死骸に向かって2人で押し合って騒いで通る。理沙子ちゃんに強く押されて、僕が毛虫の木の真下に。そこにある死骸を踏まないように、うまくかわして通り抜けた。そんなくだらないやり取りをしながら2人で楽しく歩き続ける。なんだかすごくませていて、少し気も強そうで・・・・・普段はあまりしゃべらない理沙子ちゃんだったけど、なんだかこうしてしゃべってみると普通の子。というよりも、なんだか他の子よりもしゃべりやすく感じられた。

イメージと違う理沙子ちゃんの印象を感じながらいろんな会話をして歩いていると、いつもより帰り道がぜんぜん早く感じられた。見るともう、僕の一番好きな富士山が見える丘についていた。そこには夕日に変わりそうな太陽の中、まだまだ元気な富士山がはっきりと見えていた。疲れてあまり会話がなくなってきた2人。その丘から富士山を見ながら、無口になったまま静かに歩き続けた。すると理沙子ちゃんが、落ち着いた表情でゆっくりと僕に話しかけてきた。

「そうそう、それでさ・・・・給食の時に言ったお願いなんだけど・・・・」

ついに本題が始まった。待ちに待った理沙子ちゃんの僕へのお願い。図書室の時、理沙子ちゃんはなんだかはずかしそうに僕と話をしていた。もしかしたら僕のことが好きなのかもしれない・・・・・あの時僕はそんな風に感じていた。なんだか少し期待が高まる。理沙子ちゃんが僕に告白をするのではないか・・・・・そんな期待が高まってきていた。

「実はさ・・・・私・・・・・・・のぶ君のことが好きなんだよね・・・・・」

・・・・・・・・・完全な勘違い。予想通りの恋愛話だったけど、僕じゃなくてのぶ君への告白。まあ、そんなもんだろうと思ってはいたけど・・・・・でも実は、いつも楽しそうに騒ぎながら恋愛話をしている理沙子ちゃん達がすごくうらやましかった。なので、僕もその話題に入る事ができただけですごくうれしかった。

「あっ・・・そうなんだ・・・のぶ君かっこいいもんね！」

興奮も驚きもしていないふりをして、うまく答えを返した。でも本当は心がどきどき。あの理沙子ちゃんが好きな男子は・・・・・・なんと、のぶ君だったのだ！そして理沙子ちゃんが続けて僕に言ってきた。

「それでさっ・・・きよ君ってのぶ君と仲がいいよね？だからなんとかしてくれないかな～って思ってさ・・・・」

これが理沙子ちゃんの僕へのお願い。2人をくっつけてほしいと言うのだ。でも、そういう恋愛話が苦手な僕は・・・・

「・・・・・・・・・う～ん。なんとかって言ってもね・・・・・・・」

言葉に詰まった。言葉に詰まっていると理沙子ちゃんが・・・・

「ねーねーその前にさ！のぶ君って他に好きな子いるの？？」

どんどんせめてくる理沙子ちゃん。やっぱりそういう話には慣れて

いるだけあって、新しい言葉がどんどん出てくる。

「えっ・・・・え゛〜・・・・好きな子って・・・・そんな話のぶ君としたことないしな〜・・・・」

なれない話の内容で、僕は言葉が詰まってばっかり。僕がおどおどしていると、続けて理沙子ちゃんが驚きの一言を僕に言ってきた。

「それはそーと、きよ君ってさ！　綾ちゃんの事が好きなんでしょぉ〜！？」

（・・・・・・！！！！？？？？？？？？えっ？？？？うっうそ！！！？？なんでそんな事知ってるの？？？誰にも言ったことない僕の好きな女子の名前！！なんで理沙子ちゃんは知っているのだ！！？？）

焦った僕は、早口みたいなあたふた声で答えを返す。

「なっ・・・・なに言ってんだよ理沙子ちゃん！！なっなんでそんなこと・・・・・・」

ばればれのあわて方。はずかしすぎて耳まで赤くなってきた。

「へっへ〜。きよ君みてればわかるわよっ。そんなの」

（・・・・・・なんでわかるんだ？？？僕はそんなにも綾ちゃんが好きなことを表に出していたのか！？）

僕があわてたままもごもごしていると、続けて理沙子ちゃんが・・・・

「じゃあ、きよ君が綾ちゃんを好きな事は黙っていてあげるから、何とか私とのぶ君の事をくっつけてよね。それじゃぁ！また明日！」

・・・・・と完璧な捨て台詞で帰っていった。

（・・・・・ばれていたのか、僕が綾ちゃんの事を好きな事・・・・・理沙子ちゃんが気付くって事は・・・・・まさか綾ちゃんも気付いている??・・・・・・・そんな事はないよな・・・・・・）

1人になった帰り道。夕日に変わってしまった太陽を横に、深呼吸をしながら心を落ち着かせた。やっと心のどきどきが消えてきたので、もう一度ゆっくりとさっきの理沙子ちゃんとのやり取りを思い出しはじめた。

考えれば考えるほど心配になってくる。その「綾ちゃんの事が好き」だというばればれの態度・・・・いったいどんな態度だったんだろう・・・・

（よし！！・・・・まず明日からは綾ちゃんの事をあまり見ないようにしよう・・・・）

どんな態度が悪かったのかがわからない僕は、とりあえず「綾ちゃんを見つめてしまう」という行動をとらない事を決めた。

僕は、綾ちゃんの事が好きな事を絶対に誰にもばれたくなかった。誰かに「学校で好きな子いるんでしょ??」とか「誰が好きなの??」とか聞かれても、僕は必ず「好きな子はいないよ！」と答えていた。なぜなら、それははずかしがりやだから。自分が好きな子を他の誰かが知ってしまったら・・・・・もしかしたら僕は不登校に

なってしまうかもしれない。

そんないろんなことを考えながら歩いていると、家までの距離がすごく短く感じられた。本当に明日からの態度には気をつけないと・・・・なんだか学校へ行くのがすごく辛く、はずかしく感じた。

9、避難訓練でのアクシデント

今日もいつもの通学路を歩く。前を歩く2年生の女の子、今日は赤い傘を持っている。予報では午後に雨が降ると言っていた。でもなんだか空を見ると天気が良くて雨なんか降らなそうな気がした。何もしゃべらないで歩く通学路。今日も頭ではいろんなことを考える。

先週、理沙子ちゃんに・・・・「綾ちゃんの事が好きなんでしょ？」と言われた。それから、この一週間は綾ちゃんを意識しないようにする事に全力で頑張った。それでもたまに見てしまう綾ちゃんの顔。やっぱりまったく意識しないのは難しいみたいだ。

（あ～あ・・・・・気にしないなんて無理だよ。綾ちゃんも僕の事を好きでいてくれればいいのにな・・・・両思いになりたいな・・・・）

意識をしないように・・・意識をしないように・・・そう考えていると、逆にその綾ちゃんの事を考えすぎてしまう。なんだか空回りしているみたいな不思議な毎日を送っていた。

あれから、理沙子ちゃんにのぶ君の事を言われたことはなかった。でも、理沙子ちゃんがのぶ君の事を好きだと知ってからそういう目で理沙子ちゃんを見ていると、なんだかのぶ君の事をすごく気にしているのが良くわかる。やっぱりみんな好きな子を見ていたり、近くにいったりそんな動きをしているみたいだ。僕も今まではそんな風に見られていたのかも・・・・・そう考えるとものすごくはずかしく思えてくる。僕はあの日から・・・・・

（綾ちゃんを見てしまうのはしょうがないけど、なるべく近くに行ったり、しゃべりかけたりはしないようにしていこう・・・・・）

と心に決めていた。

学校に着いた。いつも通りに始まった今日の通学路。でも今日は、そのいつもとは違う大切な大イベントがあった。それは・・・・・・避難訓練。

勉強の授業を思いっきりつぶしてみんなでわいわい楽しいイベントだ。避難訓練は3時間目。避難訓練の時間が楽しみな僕は、その時間が来るのをドキドキしながら待ち続けた。

「はい！次の授業は避難訓練です。いいですか！？予定では後20分後に地震が起きて、給食センターから火災が発生します。心して待つように・・・・その前に、地震が発生してからの動きと避難経路を説明します。いいですか・・・・・まず・・・・・・・」

ついに始まった避難訓練。先生の話によると・・・まずアナウンスによる地震が発生。「ただいま震度5の地震が発生いたしました」そしたらすぐに机の下に隠れる。その後、非常ベルがなって、もう一度アナウンス。「ただいま、給食センターより火災が発生いたしました・・・・」それを聞いたら廊下に整列。先生の指示にしたがって校庭に行く。この時だけは上履きのまま校庭まで行ってもいいみたいだ。なんだかドキドキの大イベント。

（どーしよー楽しみだな・・・・・）

時間が近づいてきて、何だか変な緊張までしてきた。

「はい、そろそろ地震が発生しますからね・・・・いいですか・・・

・・」

先生の言葉を聞いてみんなもなんだかそわそわしてきた。やっぱりみんなも避難訓練が楽しみみたいだ。そしてついに、少しざわついていた教室に、避難訓練の始まりを告げるアナウンスが流れ始めた。

「ただいま震度5の地震が発生いたしました！・・・・ただいま震度5の地震が・・・・」

「地震が発生しましたよ！！！早く机の下に隠れて！！」

アナウンスが流れると、すぐに先生がみんなに向かって叫んだ。それを聞いたたけちゃんは・・・・

「うわうわうわぁぁぁぁ～どーしよぉぉ～！！！おっおかあさ～ん！！！」

興奮しながら、また変なダンスをしてみんなを笑わしている。

「こら！早く隠れなさい！！」

先生が出席簿でたけちゃんの頭を軽くたたいた。机の下に隠れるみんな、いつもとは違う不思議な光景だ。机の下に隠れて周りを見てみると、いろんな消しゴムのかすとかえんぴつ、ゴミなどが散らばっていた。

いつも思うのが飯田君の席。その飯田君の席の周りにだけ、なぜだかいろんなゴミが落ちている。机の周りを見るだけで、その人の性格とかまでわかってしまう・・・・・・ジリジリジリジリィィィ・・・・・・・

「ただいま・・・給食センターより火災が発生いたしました・・・・ただいま給食センターより・・・・・・」

「うわうわうわぁぁぁぁ～今度は火事だぁぁぁぁ！！！！おしっこもらしちゃうよっぉぉぉぉぉ！！！！！」

股に手を当てて叫ぶたけちゃんを見てみんな大笑いだ。笑いながら僕達はすぐに机の下を飛び出して、廊下に整列をした。廊下に出るとびっくり・・・・・廊下は、本物っぽい火事の煙でいっぱいになっていた。

（なんだこの煙は・・・先生達も気合が入っているな・・・・・・）

廊下には小さな缶詰みたいなのがいっぱい置いてあった。先生達が準備していた煙を出す特別な道具。そこから吹き出すものすごい量の煙。

「はい！！移動しますよ！！準備はいいかな！！？」

そんな僕達の驚きを無視して、忙しそうに先生がみんなに言った。校庭への移動開始だ！！

「う・・・ぅ・・・ぅ・・・わ・・・ぁ・・・ぁ・・・ぁ・・・・・・・・・・た～・・・・・・すけ～・・・・・・・・てくれぇ・・・ぇ・・・ぇ・・・～・・・・・・」

たけちゃんがスローモーションになった振りをして、ものすごいゆっくりと走る動きをしている。何が何でもみんなの事を笑わせたいみたいだ。

「いいかげんにしなよ！たけちゃん！！」

横でのぶ君がまじめに怒った。やっぱりしっかりしていてかっこいいのぶ君。あれあれ！！？きれいに２列で並んでいたのに、いつの間にか理沙子ちゃんがそののぶ君の横に引っ付いて肩を並べている。

「そうよね！のぶ君。早くいこ！！」

そう言って理沙子ちゃんは僕の方をちらっと見て、目で合図をした・・・・

この間の帰り道での約束・・・「のぶ君と理沙子ちゃんをうまくいくようにさせる」それを今実行しなさい！！というちら目の合図だ。それを見た僕は思い出したように・・・・・・

「あっ・・・・・ああのぶ君、そうだよ！！はっ早く行ったほうがいいよ・・・ほら！理沙子ちゃんと一緒に・・・」

と焦って少し強引気味な台詞をのぶ君に言ってしまった。それを聞いたのぶ君は・・・・

「え？？うんでも・・・列乱れちゃってるよ！列を作り直さないと！理沙子ちゃん！早く先行って自分の場所に戻りなよ！」

と理沙子ちゃんを前に押していった。のぶ君に押される理沙子ちゃんは・・・

「あ・・・そっそうよね・・・ごめん先行くね！のぶ君・・・」

と言うと僕に（何やってんのよ、きよ君！）という冷たい目を送りながら、先に進んでいった。

結局離れ離れにされた理沙子ちゃん。力になれなかった僕。せっかく理沙子ちゃんが僕の事を頼りにしてくれたのに・・・・ほんとに情けない。

それにしても、理沙子ちゃんはどれだけのぶ君を好きなのか・・・・はずかしさもなく、自分からそののぶ君に近づいていった。なんだかそんな行動を堂々とできる理沙子ちゃんがすごくうらやましかった。

（僕にはあんな事はできないな・・・・綾ちゃんに近づいていって肩をくっつけるなんて・・・・うわっ何を想像しているんだ！！はっはずかしい！！）

変な想像をしてテレながら両手をばたばたさせるようにその妄想を消す僕。そんな僕が妄想から現実に戻ると、並んでいた列はもう乱れまくっていて、どこに誰がいるのかもわからないくらいになっていた。しかもものすごすぎる煙の量。進めば進むほど煙が多くなっていって・・・・・・・もうここは、前がまったく見えないぐらいになっている。

（ここまでやってほんとにいいの！？？）

僕はあまりにもすごすぎる煙を見て少し心配になってきた。すると・・・・

「ちょっ・・・・ちょっとみんな大丈夫か！！？けっ怪我するなよ！！」

遠くで先生がその煙に焦って、みんなを探し回っているのが目に入った。先生があわてるほど危険な状態。そんな中、前に進むと・・・・・・

（・・・・うわっなんだよ！ここは階段じゃないか！！）

すごすぎる煙で、まったく気付かなかった階段。もう足元に何があるかもまったくわからない。

（いくらなんでもすごすぎるよ！！！？？？ほんとに大丈夫？？？・・・・・・・・）

僕がそう思ったその時。

「きゃあぁぁ・・・・・・・」

（・・・・・・・・・！？この声は・・・・綾ちゃん！！！）

横でした綾ちゃんの声に振り向くと、煙で前が見えなくなって階段で転んでしまっている綾ちゃんがそこにいた。あわてる僕。とっさに・・・・ほんとにとっさに何も考えず、その綾ちゃんを起こしてあげている僕がいた。自分の行動に自分で焦る。はずかしがりやのこの僕が、綾ちゃんにそんな事をしているのだ！しかも僕はなんと、その綾ちゃんと手と手をつないで起こしてあげていた！

（・・・？？うっ・・・・うわぁぁ～はずかしい～・・・・・・・・なっなにやってんだよ僕は・・・・）

「あっあぁぁ・・・・・だっ大丈夫！！？？？綾ちゃん」

僕は赤くなりながら裏返りそうな声で綾ちゃんにしゃべりかけた。すると・・・・

「あっ・・・・・・・・うん、大丈夫・・・・・・」

・・・・・と綾ちゃんは言って、一瞬だけ僕を見るとテレながら先に階段を下りていってしまった。

（うわぁぁぁ～どーしよー！！なんてバカな事をしちゃったんだ！！あの綾ちゃんの手を握ってしまった！！！はずかしいはずかしいはずかしい！！！！！！！！！ばかばかばかばかばか！！！！！しかもやさしくかっこいい台詞が言えればいいのに、あわてて言った・・・「だっ大丈夫！！？？？」の台詞。ぜんぜんかっこよくもなんともないよ～！！！うわぁぁぁ～今の行動、みんなに見られてないかな・・・・・）

僕は心の中でその全部をはずかしがった。そして何よりも、はずかしがりやの僕はその出来事を他のみんなに見られていないかがすごく気になっていた。校庭に着いた僕。校庭ではもう、みんながきれいなはじめの2列を作っている。すると僕を見つけた五十嵐さんが・・・・

「あっ！きよ君！！」

いきなり大声の声かけ！

（もしかしたら、さっきのはずかしい出来事を五十嵐さんは見ていたのかもしれない・・・）

僕は妙にその五十嵐さんの顔が何かを知っているような・・・そんな表情に見えた。そんな怪しい笑顔で僕に詰め寄ってくる五十嵐さん。僕はあわてて五十嵐さんに言った。

「へっ！！・・・・なっ・・・・なに！！？？」

悪いことをした後みたいに何だか不自然なしゃべり方だ。それを聞いた五十嵐さんが続けて僕に言ってきた。

「も～！！きよ君、どこいたのよ！！途中からどこにも居なかったから心配したじゃない！！さがしたのよぉ～！！」

（へっ・・・・な～んだそういうことか・・・・・よかった、五十嵐さんには見られていなかったみたいだ・・・・）

ほっと一安心。そして他のみんなを見てみると・・・・・・みんなもいつも通りの普通の会話をしている。

（・・・・ふ～助かった・・・・・・どうやら誰にも見られていないみたいだぞ・・・・・・・）

僕はいろんなみんなをきょろきょろ見ながら、心の底から安心感を味わった。

校長先生の話と、消防署の人の話が始まった。だけどもうそんな話はどうでもよかった。ただたださっき起こった綾ちゃんと僕との出来事を、頭の中で繰り返し思い返した。階段をおりる僕。横で転ぶ綾ちゃん。手を握って起こしてあげる僕・・・・・・立ち去る綾ちゃん・・・・・何回思い出してもはずかしい・・・・・・そんな事を考えてる僕は、いつもより何度もちらちらと綾ちゃんを見てしま

っていた。

（さっきの事、綾ちゃんはどう思ってるんだろう・・・・・？）

何度も何度も綾ちゃんを見ていると、なんだか綾ちゃんもこっちをちらちら気にしているように感じる。たまに目と目が合う僕と綾ちゃん。

今までは僕が綾ちゃんを見るだけだった。ただただいつも綾ちゃんの横顔を見るだけの毎日だった。だけども今日は違う。綾ちゃんもこっちを意識してくれている。いい風に考えれば、綾ちゃんが僕に興味をもってくれているという事。なんだか少し進歩したような・・・発展したようなそんな気がした。

はずかしいはずかしいと思っていたさっきの行動も、なんだか今では正しい行動だったと思える。

（・・・・よくやったぞ、清正！！今までで一番綾ちゃんと大接近したぞ！！そのままがんばれ！清正！！）

・・・・僕は心の中で、積極的だった自分を興奮しながらほめ続けた。

１０、腕相撲大会

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・「ねー・・・・ね
ー清正君・・・・・・・・・・」

（綾ちゃんの手・・・・・・・・・・すごく柔らかかったな・・・・・
・・・もう一度あの時に時間を戻せたらな・・・・・）

「ねー清正君！！聞いてる！清正君？！」

（・・・・・・・・・・はっ！！）

驚いて横を見るとメガネの恵美ちゃんが、大好きな小説を開きなが
ら少し怒り顔で僕を見ていた。

今は昼休み。僕は静かな暖かい図書室で、ボーっと避難訓練での
綾ちゃんとの出来事を思い出していた。

「清正君どうしたの！？本も開かないでボーっとして・・・・」

恵美ちゃんがそんな僕を見て不思議そうに言った。続けて恵美ちゃ
んが・・・・

「私のさっきの話聞いてた？・・・」

・・・・・・そう聞かれた僕は・・・・・・

「えっ・・・なんだっけ!?」

避難訓練の事を思い出していた僕は、その恵美ちゃんの話をまったく聞いていなかった。そんな「?」を飛ばしながら首をかしげる僕を見て、恵美ちゃんが強めの言い方で言ってきた。

「さっき話した腕相撲大会の話だよ!私のクラスで一番腕相撲が強かったのは、雄大君だったって話。」

（・・・・・えっ・・・・腕相撲?）

苦手なことが多い僕のたった一つの特技、それが腕相撲。隣のクラスの恵美ちゃん。そのクラスでは「みんなの時間」を使って腕相撲大会をやったみたいだ。

「私のクラスの担任の小島先生と、清正君のクラスの担任の佐藤先生ってすごく仲がいいよね?だからもしかしたら清正君のクラスの『みんなの時間』でも腕相撲大会やるかもしれないよ」

次の授業がそのみんなの時間。

「みんなの時間」という時間は、いつもは勉強でできない大切な事をする、週1回用意された特別な時間だ。学級委員を決めたり、席替えをしたり・・・・いろんな事をする。勉強じゃない楽しい時間。その時間を使って、今日は腕相撲大会をやるかもしれない・・・得意な腕相撲。いつもはかっこ悪くて、はずかしい失敗で目立ってしまう僕だけど、もし腕相撲大会をやったとしたら、かっこよく目立つことができるかもしれない。避難訓練での前向きな行動。今日の僕は、いつもよりも自信があった。そんな僕は、もしかしたらやるかもしれない腕相撲大会だけど、なんだかそのみんなの時間がもの

すごく楽しみになってきた。

「はい！！今日のみんなの時間は・・・・・・・・腕相撲大会です！！！！！！！！！」

（やったぁぁぁぁぁ！！予想通りの腕相撲大会！！）

授業がはじまるチャイムと一緒に言った先生の一言に、僕は小さなガッツポーズをとった。

ルールは簡単、トーナメント制だ。２人ずつ順番に黒板の前にある先生の机に行って、その机をはさんで勝負がスタート。勝負をしている机の裏にはそのトーナメント表が書かれている。そして勝ち上がると先生がそのトーナメント表に、赤いチョークで線を引いていく。

（・・・・・よしっ！見せ所だぞ！！・・・・・）

僕はその順番を心待ちにした。

いろんな友達がいろんな子と対決をしていく。負けて悔しがる子、勝ってガッツポーズを決める子、その時だけはその２人だけにみんなが注目をする。僕にとっては１番の見せ場だ。そしてついに僕の順番が回ってきた。１回目の勝負。先生の机の前まで行って、片腕を置いて準備をする・・・・・・・・

「・・・・・レディー・・・・・ゴー！！」

先生の合図で勝負が開始。始まってすぐに、僕は相手を簡単にぶっ倒した。

「うおぁ・・・・すげぇ・・・・」

いつもは笑わしているだけのたけちゃんが、僕の腕相撲を見てめずらしく素直な驚きの言葉を言った。そんなたけちゃんを見て僕は思った。

（これはいい所までいけそうだぞ・・・）

僕の得意な腕相撲、僕の「勝てる」という自信はその一回戦でまた大きく膨らんだ。

腕相相撲大会はどんどん進み、さっき僕の強さに驚いていたたけちゃんの順番が回ってきた。相手は不幸にもあの五十嵐さん。

「いくわよぉぉ！！たけちゃん！！」

どんどん敗れていく女子達。そんな中、五十嵐さんだけは順調すぎる勝ち上がりを見せていた。

「ひょぇぇぇぇ・・・・五十嵐かよ・・・・・・きついなぁ～・・・・」

腕をまくって気合を入れる五十嵐さんを見ながら、たけちゃんは弱気な発言をした。たけちゃんも腕相撲が弱いわけじゃない。かなりの力を持っている。そんなたけちゃんだけど・・・・・

「いてててててて！まいった！まいりました！！」

・・・・五十嵐さんの圧勝で勝負が決まった。

（・・・・やばい・・・・・）

黒板のトーナメント表を見ると、次の僕の対戦相手は、なんとその五十嵐さんだ。あの強さを見ると、優勝するには必ず戦わなければならない相手。それが早いか遅いかの違いだ。深呼吸をして冷静に、焦らずその対戦を待った。

どんどん進んでいく腕相撲大会。強いのはやっぱり優勝候補ナンバーワンののぶ君。なんでもできるのぶ君は、うますぎる試合運びで順調に勝ち上がった。そしてもう1人の優勝候補、太っている飯田君。飯田君はどんなに弱い相手でも、太い腕を使って容赦なくねじ倒す。あっさり負けてしまったのがデブヤセコンビのもう1人、やせの山田君。無口で目立たない山田君も、なぜか飯田君の試合になるとか細い力のない大声で飯田君を応援していた。

進んでいく腕相撲大会。黒板のトーナメント表は、もうかなり上のほうまで来ていた。そのトーナメント表を見ながら、先生のうれしそうな一言。

「さあ！！次は大一番だね！どっちが勝つのかな～？」

ついに五十嵐さんとの対決の時が来た。もう一度深呼吸をする僕。

「・・・・・・・ふ～・・・・・」

そして黒板の前に行って、その五十嵐さんを見上げる。相変わらず僕より大きいその体。いつも僕はその五十嵐さんにバカにされて・・・いじめられて・・・・辛い毎日を送っている。僕は心の中で・・・・・・

（・・・・今日は負けないぞ・・・・・）

と言い続けた。そしてその五十嵐さんの手を握る。握ってビックリ、あの綾ちゃんの暖かくて柔らかかった避難訓練の時の手とは違って、ごっつくて大きな男らしい手。握るだけでその強さがビシビシ伝わってくる。

「準備はいいかな？・・・・・・・レディー・・・・・・・・・ゴー！！」

先生の合図、勝負が始まった！！

「ふん！！」

五十嵐さんの男勝りの太い声！その声とともに勢いよく僕の手を押し倒しに来た！・・・そんな五十嵐さんの力を手で感じて・・・・僕は思った。

（・・・・・・僕は腕相撲が本当に強いんだな・・・・・・）

心で思う本音の気持ち。あんなに強かった五十嵐さんも、やっぱりこんなもんだったのだ・・・正直にその五十嵐さんの力が、僕には弱弱しく感じられた。僕は余裕の笑みを見せながら、その五十嵐さんを簡単にねじふせた！！

「えっ・・・・・・え〝〜！！！！！」

教室に響き渡る驚きの声。みんな僕の余裕すぎる勝ちを見て驚きの・・・・・・尊敬の声を上げた。

（・・・・・・いける。今ならいける！）

僕の自信は確かなものになった。

（このクラスの優勝は必ず僕がものにしてやる！！今日こそはいつものかっこ悪い目立ち方と違って、かっこよく目立って見せる！！）

いつもより堂々とした歩き方で歩いて　どんっ　と自分の席に座る。そして腕を組んで、目を閉じて、また自分の対戦を待つ。あの飯田君やのぶ君もそんな僕を見て、目を大きく丸くさせた。

それでもこの2人、飯田君とのぶ君は間違いなくものすごい力を持っているはず。肩を大きく回す飯田君。緊張をしているみたいだ。それもそのはず、次の飯田君の対戦相手は・・・・・・もう1人の優勝候補、のぶ君だ。2人の直接対決！！！机をはさんで両側に立つ2人・・・まわりではいろんな友達がざわざわざわざわとどっちが勝つかを予想していた。そこで先生の一言・・・・

「レディー・・・・・・・・・・・・」

・・・・・さっきまで騒いでいた教室のみんなが一気に静まり返る。ついに始まる、飯田君とのぶ君の直接対決。その結末にみんなそろって息をのんだ・・・・

「・・・・・・・・ゴー！！！！！！」

勝負が始まった！・・・・・・・ビシッ・・・・・と止まる2人の動き。震えてどっちにも傾かない。名勝負だ！！じりじりじりじり時間がすぎる。何も起こらない数十秒間。長すぎるその時間を動かしたの

は・・・・・・・・・のぶ君だった。

「う・・・・・・おぉぉぉぉぉ・・・・・・！」

ゆっくり・・・・ゆっくりとその手が傾き始める。あの飯田君が押されているのだ。

「がっ・・・・・・・・がんばれ！！いいだく～ん！！！」

静かな教室に、飯田君の親友、山田君からの心のこもった応援が響いた！それを聞た飯田君が踏ん張りながら一言・・・・

「くっ・・・・・・・くそぉぉぉ！！！！！」

押し戻そうと粘っていた飯田君だったけど、一気に力が抜けてのぶ君に負けてしまった。

「おっお～！！！！！！！」

教室に響き渡るみんなの声。これでのぶ君は決勝進出決定だ！！

「よっしゃぁぁ！！」

のぶ君がかっこよくガッツポーズをとった。そんなのぶ君を女子達は憧れの目で見つめていた・・・・・

相変わらずかっこいい親友ののぶ君。1番がのぶ君で2番が僕。そんな関係がずっと続いていた。僕はいつもそんなのぶ君をうらやましく思っていた。憧れ続けていた。でも今日の僕は今までの僕とは違う・・・・・・

・・・・うらやましいというよりはむかつく・・・・

いつも僕の心の中に隠れていた本音の気持ち。それは・・・・・・・

（なんで僕はのぶ君に勝てないんだ？・・・・・・）

僕はそんな気持ちを持ちながら、負けてもいつも笑顔でへらへらしていた。それはのぶ君に負けて当たり前だと思っていたからだ。だから笑ってごまかす事しかできないでいた。でも今は腕相撲。僕のたった一つだけ得意な腕相撲だ。ついに・・・・・ついにのぶ君に勝てるチャンスがめぐってきたのだ。ここだけは僕が目立ちたい。僕がヒーローになりたい。絶対にのぶ君に勝ちたい！かっこよくポーズを決めるのぶ君を見て、僕は心の底からむかついた。

僕の準決勝は簡単に終わった。もちろん僕の圧勝。僕にはもうのぶ君しか映っていなかった。いつも1番ののぶ君、負けてしまう僕。そんな2人が今決勝の舞台に上がった。間違いなく、のぶ君も今までにない僕に対する恐さを感じているはずだ！！

（腕相撲じゃなきゃ勝てるのに・・・今日は負けてしまうかも・・・）

そんな気持ちを持っているはずだ！一言もしゃべらず、そののぶ君と目と目をかわす。いつもは仲良く笑顔の2人、でもこの時の2人にはまったく笑顔がなかった。かわした目と目は睨み合う目。完全に敵。対決の机を2人ではさむ。仲のいいのぶ君・・・・僕の親友だ。ずっと心の中に持っていたその親友とは違うもう1つののぶ君

の存在・・・・・・

・・・・・・ライバル・・・・・・

一瞬目を閉じて大きく深呼吸をした。そしてゆっくりとそののぶ君の手を握る。何回も握りなおす手、自分の一番いい握り方をしたいからだ。

（・・・・・・絶対に負けられない・・・・今回だけは・・・・今回だけは・・・・・・）

心臓の音が、何もしていないのに聞こえてくる・・・・・・

「さ～・・・・・いくよ・・・・・・レディー・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・もう待ったなし。周りの友達がいろんな言葉で応援しているけど、そんな声はもう僕には聞こえていなかった・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・ゴー！！！！！！！！！！！！！！」

運命の勝負が始まった。

11、腕相撲大会決勝戦

ビシッッッ！！

固まって動かない2人の手。

「くっ・・・・・・・・くそぉぉ！！」

さっき、強敵の五十嵐さんを簡単に倒した僕は、圧勝を狙って最初から全力でのぶ君に挑んだ。それなのに、まったく動かないのぶ君の腕。震える2人、力はまったく互角だ。

「くっ・・・・・・・・・・・・んん！！」

・・・・・苦しむのぶ君。この僕があののぶ君を苦しめているのだ。僕にとってはじめは、クラスで1番とみんなの注目が目的だった。でも今はもうそんな事はどうでもいい。目的は1つ。のぶ君に勝つ・・・・・・・・

・・・・・・・・動きが固まってからどれくらいの時間がたったのか・・・・・・・僕にはまだ，余力が残っていた。腕相撲で勝つコツ。「相手の体力を奪う！」それだ。この余力を使えば必ずのぶ君に勝てる！！僕はその力を使うタイミングをずっと待ち続けた。

（・・・・・・・よし！今しかない。）

と思ったその時だった・・・・

「こぉぉぉぉのぉぉぉぉぉぉ！！！」

のぶ君の力が、一気に僕を苦しめ始める。

「えっ・・・・」

焦る僕。そうなのだ。のぶ君もまた、体力を奪う作戦を使っていてまだ力を残していたのだ。

「ちょっ・・・・・ちょっと・・・・・まっ・・・・・て・・・・・・！？」

一気に押される僕。やばい・・・・手の甲が、机につくぎりぎりまで来てしまった。

（やっぱり・・・・・・・・・やっぱり僕はだめ男なのか・・・・・・いつまでたってものぶ君に勝てないのか・・・・・）

勝負をあきらめかけたその時！！

今まで耳に入っていなかったみんなの応援。のぶ君の事や僕の事をみんなが応援していた。その飛び交う応援の中から、聞いた事があるきれいな声が僕に聞こえてきた・・・

「きよ君・・・・がんばって！」

・・・・・・・間違いない・・・・・綾ちゃんの声だ・・・・・・

・・・・・・・えっ・・・・・

あ・や・ちゃ・ん・が・ぼ・く・を・
お・う・え・ん？

その声を聞いたその時、僕に残っていた力が一気に爆発した。いきなりの強さでのぶ君が焦りの一言・・・・

「うっ・・・・・うそっ・・・！？」

バン！！！！

勝負がついた。

「おっ・・・・・・・・・・・・おー！！！！！！！！！！！！！！」

練習もしていないのに、みんなの声がきれいに揃う。僕の勝利にみんなが口を揃えて驚いていたのだ。何回目の挑戦だったんだろう？ついに、ついにあののぶ君に勝つことができた！！！

小さい頃から一緒に遊んでいたのぶ君。今まで、そののぶ君に勝った事は1回もない。ずっとのぶ君の後ろをついて回っていた。1度は勝ちたかった。どんなスポーツでもどんなゲームでもどんな遊びでも何でもよかった。ただ、ただ、1回だけは、そののぶ君に勝ちたかった。いつまでたっても2番、ずーと2番は絶対にいやだったのだ。僕はこの腕相撲でそののぶ君に始めて勝つ事ができた！僕は手を教室の天井に向かって高々と突き上げた。そして一言・・・

「よっ！！！しゃぁぁぁぁ！！」

いつもかっこよく勝利するのぶ君。そののぶ君を真似して、僕は自分なりのかっこいい言い方と顔でそのガッツポーズをとった。

そんな僕にみんなからの拍手がいつまでも・・・・いつまでも降り注いだ。

１２、冷たいのぶ君との一斉下校

「ふぁぁ～・・・・・・・」

腕相撲大会で疲れた僕は、校庭に並びながら大きなあくびをした。

今日は一斉下校。朝いつも学校に向かう通学班、それと同じメンバーで家まで帰る一斉下校だ。あの腕相撲大会が終わってから、間違いなく友達の僕に対する態度が変わった。いつもはあまりしゃべりかけてこない友達も、僕にどんどん話しかけてくる。なんだかヒーローになったみたいで気持ちがよかった。

そんな友達に囲まれる僕に、のぶ君は冷たい視線を送ってきた。少しそれが気になったけど、気にしないふりをしてみんなのいろんな質問に答え続けた。

一斉下校の今、校庭では朝の通学班の一列を作っている。先頭はのぶ君。一番後ろが僕。僕がみんな揃った事を確認して、のぶ君にいつも通りの大きな声を言った。

「のぶ君！！みんな揃ったよ～・・・」

その声を聞いて　ちらっ　と僕を見るのぶ君。その目が・・・・・いつものぶ君とは違った。ものすごく冷たい目・・・・・友達を見る目じゃない。そして何も言わずにまた前を見る。

（・・・・・なんだか気まずいな・・・・・）

そんなのぶ君の態度を見て僕は思った。

小さい頃から親友ののぶ君。僕はそののぶ君と一度もけんかをした事がない。別に今もけんかをしたわけじゃない。だけど・・・・なんだか気まずい雰囲気になっていた。

いつも1番ののぶ君。それを見ながら僕は「・・・すごーいのぶ君。なんでそんなにすごいの？」と口癖のように笑顔で言っていた。もしかしたら僕達2人はそんなやりとりでバランスをとっていたのかもしれない。そのバランスが崩れてしまった腕相撲大会。むきになっていた僕。それのせいで2人の仲がおかしくなり始めている。

「いくよ！！みんな！！ばらばらにならないようにね！！」

いつも通りのリーダーシップで、のぶ君が言った。

みんなで歩き始めた下校道。この一斉下校も朝の通学とまったく同じ。前ではのぶ君達が楽しそうに会話をしている。一番後ろの僕は下を向いたままいろんな事を考えて1人で歩く・・・・・・

今日一日で何かが変わったと思った。いつもの僕とは違う新しい自分になったと感じた。でも今、またいつもと変わらずみんなに相手をされない帰り道を歩いている。前では人気があるのぶ君が、みんなと楽しそうに会話をしている。

「・・・・・あ～あ・・・・・」

ため息をついた。

結局あの腕相撲大会なんて一つのイベント、一瞬みんなが僕に注目しただけだ。変わった事といったら、のぶ君が僕に冷たくなった事、

それだけ。２人の仲が崩れてしまった事だけなのだ。

（・・・・あぁぁぁ～・・・なんで僕はあんなにむきになっていたんだろう。こんな事ならあの腕相撲大会でのぶ君に勝たなければよかった・・・・・）

成功だと思っていた腕相撲大会、僕はその大きな失敗に気付き始めた。

そういえば、その腕相撲大会の決勝戦で僕が負けそうになっていた時、綾ちゃんの声で「きよ君・・・・がんばって！」と聞こえた気がした。その声を聞いて励まされた僕は、そののぶ君に勝つ事ができたのだ。あの声は本当に綾ちゃんだったのかな？勝負に夢中になっていた僕は、疑いながらあの声を聞いていた。もしかしたら幻？？でも確かに聞こえた気もする。本人に聞くのは恥ずかしいし・・・・・

避難訓練で転んだ綾ちゃん。僕はその綾ちゃんの手を握り起こしてあげた。はずかしかったあの行動。でもその行動のおかげで、もしかしたら綾ちゃんが僕に興味を持ち始めてくれたのかもしれない。だとしたらあの僕を応援した声も、本当に綾ちゃんの声だったということになる。腕相撲大会の失敗を思い出すと落ち込んでしまうと思った僕は、綾ちゃんとの避難訓練を思い出しながら前向きに帰り道を歩き続けた。

そんな事を考えながら無口に歩いていると、いつの間にかもう、僕の家の前まで着いてしまった。すると、ずっと前を見ていたのぶ君が後ろを振り返って僕の方をちらっと見た。またあの冷たい目だ。

「じゃっ・・・・じゃあね・・・・のぶ君・・・・・・・」

なんだか言いにくかったその言葉を、僕は頑張っていつも通りに言った。それを聞いてものぶ君は何も言わず、また前を見てさっさと自分の家に入っていった。

（・・・大丈夫・・・・今日だけだ・・・・今日だけ仲が悪いだけだ・・・・）

僕はあまりにも今までと変わってしまったのぶ君の態度を見て、そのいやなイメージを振り払うように心の中で言い続けた。

１３、雨の朝の寂しい通学路

目の前にある水たまり。でも長靴だから平気だろう。僕は道を邪魔する水たまりを、どうどうとまっすぐ水を飛ばしながら歩いた。水たまりを歩くと気持ちがいい。なんだか何かを壊しているような気持ちよさを感じる。前を歩く2年生の女の子、雨の日の今日はいつもの赤い雨がっぱを着ていた。

今日は雨、すごく強く降っている。灰色の水たまりを見ながら、雨の日の沈んだ通学班で学校までの道を歩いた。雨の日の通学班、本当にいつもより元気がない。いつもは、前を歩くのぶ君達の楽しそうな会話が聞こえてくる。それなのに、雨の日はまったく会話をしていない。聞こえてくるのは激しい一定リズムの雨音だけ。ザァーザァー・・・・・・・・なんだか寂しくなってくる。

この間、クラスで腕相撲大会をやった。その日からのぶ君が僕に冷たくなった。時間がたてば元に戻ると思っていた2人の仲。それなのに、あれから一週間たった今でも、あの時と変わらずにのぶ君は僕に冷たい態度しか見せていなかった。２０分休みの時に・・・・・・

「ドッジボール一緒にやろう！！」

といつも通りに誘って見た。それでも、聞こえない振りをして違う友達とサッカーをしにいってしまう。

「今日一緒に帰ろう！！」

と言ってもやっぱり聞こえないふり・・・・・違う友達と楽しそう

に帰ってしまう。あんなに昔から仲が良かった2人、いつも一緒に遊んでいた2人。

（・・・・もしかしたら、もう2度と仲直りできないのかな・・・・・・）

僕はそんな事を思う辛い毎日を送り続けた。

そんな辛い学校でも今日は楽しいイベントが多いはずだった。それも天気がよければの話。今は夏前の6月、雨が多い6月だ。残念ながら今日は土砂降りの雨。今日のイベントは全部つぶれてしまいそうだ。イベントの1つ、社会化見学。授業中なのにみんなで外にいく楽しい時間。でもこの雨だと自習になりそうだ。もう1つのイベントは体育。予定だと今日がプール開きの日だ。でもそれも雨のせいで中止になりそう。寂しく増えたプールの荷物。傘だけでは隠しきれないその荷物が、哀しい灰色の雨に打たれてぬれていた。

（・・・・・あ～あ・・・・昨日から楽しみに準備していた荷物なのに・・・・今はただただ邪魔なだけだな・・・・）

使い道がなくなったプールの荷物を見ると、なんだか今日も一日いい事がなさそうに感じてしまう。そんな哀しい気持ちの中、重たい足取りで学校を目指した。

１４、社会の自習

「おはよ！」

「あっおはよう・・・・」

湿気があってじめじめしている教室。雨の日の教室は、なんだかいつもと違うにおいがする。すごく変な感じだ。その教室で社会の授業が始まるのを待ち続けた。

「それでは授業を始めるよ！！いいですか！？今日予定していた社会化見学は中止になります。よって、今日は教室で自習。で・す・が！先生がビデオを用意したのでビデオ学習とします！」

雨で中止の社会化見学。教室でビデオを見るみたいだ。先生が持ってきたビデオはもちろん流行のアニメじゃなさそうだ。気難しい眠くなるビデオのはず、あまり期待をしないでまだ電源が入っていない教室のテレビに目を向けた。

テレビが置いてあるのは窓側の天井。外の明りでテレビが見えづらくなっている。それを見た先生が教室を暗くする為に、黒いカーテンでテレビ近くの窓を全部隠した。そして流れたビデオ、その内容は・・・・・・

（あっ３チャンネルの教育番組だ！！やった！少しはおもしろそうだぞ！）

思ったより楽しそうな内容で、僕は少しうれしくなった。

みんながテレビにくぎ付けになる。そんな中、僕はせっかく内容がおもしろそうなビデオなのに、なぜかテレビを見ないでずっと綾ちゃんだけを見続けた。

（テレビを見ている綾ちゃん。やっぱりかわいいなぁ・・・・・・）

先週、避難訓練の時に僕はその綾ちゃんと大接近する事ができた。今までにない大接近。転んだ綾ちゃんを僕が起こしたのだ。しかも綾ちゃんの手を握って。そしてその避難訓練が終わった後、腕相撲大会の時に綾ちゃんは僕の事を応援してくれた。たしかではないけど・・・・・綾ちゃんの声が聞こえた気がしていたのだ。すごく発展したと感じた。進歩をしていると感じた。でも・・・・・・・でもそれから今日まで、綾ちゃんの僕に対する態度は、今までの態度とまったく変わりがなかった。

（・・・・・・あ～あ・・・・結局僕には興味がないんだ・・・・・やっぱり腕相撲の時の声は綾ちゃんの声じゃなかったのかな・・・・・・・哀しいな・・・・）

いつも僕は綾ちゃんの事を気にしていた。僕だけが気にしていた。でもあの日の避難訓練の後は、綾ちゃんも僕の方をしっかり見てくれていたのだ。なのに、今ではまったく僕を見てくれない・・・・・まったく気にしてくれない。変わらない片思い。でも、僕はそれでもかまわない。綾ちゃんを見ているだけで僕は幸せになれる。大好きな綾ちゃんにはそれだけの力があるのだ。そんな気持ちで綾ちゃんを見ていると、いきなり今まで暗かった教室が一気に明るくなった。ビデオが終わって黒いカーテンが開けられたのだ。はっと我に返る僕。

「さ～ビデオはどうだったかな？では、これからの時間は、今のビ

デオの感想文をノートに書く時間にします！授業が終わったらすぐにノートを集めるのでしっかり書いてくださいね！！」

（・・・・・え～！！かんそうぶん？？ビデオなんてぜんぜん見てなかったよ！！どうしよぉ～！！・・・・・）

僕が書ける感想文は「綾ちゃんの横顔について」それだけだ。

感想文を書く時間は２０分。結局僕は、白紙のままのノートを先生に提出してしまった。

15、雨でつぶれたプール開き

今日はプール開きの日、夏の始まり！！・・・・・・・のはずだった。でもそれも雨で中止。哀しすぎるな・・・・・おかげで今日は体育館で跳び箱に変わるらしい。体育着に着替えた僕たちは急いで体育館に移動をした。

いろんな線が引いてある体育館。カラフルなこの線にはいったいどんな意味があるんだろう？その線を使って体育をしたことなんかほとんどない。いろんなスポーツに必要な線？？なんだか不思議でならなかった。たまにその線がはがれている部分がある。なんだか汚くて、じゃまで少しいやだな・・・・・

そんな体育館を使ってプールの変わりにやるのは、跳び箱。苦手が多い僕だけど跳び箱だけは、普通に他のみんなと同じくらいなら飛べる自信があった。

マットと跳び箱の準備が終わると、先生からの注意の話が始まった。スタートの位置の説明。跳び箱の高さの説明。今日の跳び箱は６段。なんだかちょっといつもより高くて少し緊張をする。一列になって僕の順番を待つ。前を見ると次は飯田君の番らしい、走って跳び箱に向かう飯田君。そのまま跳び箱に大激突。たしかにあんなに太っていたら跳び箱も飛べるわけがない。

「はっはっはっ！！大丈夫かよ飯田！！」

たけちゃんがそんな飯田君を見ておなかを抱えて大笑いしている。次はそのたけちゃんの番だ。

「それっ！！」

・・・・さすがに人をバカにするだけはある。見事に飛んで見せた。

「やるな！たけちゃん！！」

そんなたけちゃんを見ながら、強気な顔でのぶ君が言った。そののぶ君がたけちゃんに続いて飛ぶ・・・・

・・・・・ポンッ！！！・・・・

すごすぎるジャンプ力。着地も体操選手みたいな綺麗な着地だ。

「いえ～い！！！」

たけちゃんとのぶ君が揃ってガッツポーズ。その後息を合わせて笑顔のハイタッチ。そしてまた、二人で楽しそうにスタート地点へ戻ってきた。

のぶ君が僕に冷たくなってから、なんだかたけちゃんとのぶ君がすごく仲良くなっているように感じる。名コンビみたいに仲がいい。たけちゃんは、お調子者なだけで顔も特別かっこいいわけじゃない、でもおもしろいたけちゃんはクラスの人気者。のぶ君は顔もかっこいいし女の子にも優しい。しかもリーダーシップがあって、誰もが認めるかっこいい男。しかもこの2人はどっちもスポーツ万能だ。そんな2人がコンビを組んで息を合わせて・・・・なんだかかっこいい2人組に見える。僕はそんな2人がうらやましく思えた。というよりも、のぶ君と仲良くできるたけちゃんがうらやましかった。

腕相撲大会が終わってから、僕はまったくのぶ君と会話をしていない。2人の仲が悪くなってしまったのは、腕相撲大会の決勝戦が理

由なのはわかっている。でも僕は、のぶ君と仲のいいたけちゃんを見て、「たけちゃんが僕からのぶ君をとった・・・・」そんなへその曲がった考えを持つようになっていた。

最近はのぶ君、たけちゃん、綾ちゃん、理沙子ちゃんの、４人で遊んでいるところをよく見る。休み時間もいつも４人でいる。学校が終わって帰るのも４人。その後も４人で一緒に遊んでいるみたいだ。

一度、理沙子ちゃんに恋愛相談を受けた事があった。忘れもしない学校帰り、理沙子ちゃんは間違いなく「のぶ君が好き」と言っていた。そして、たけちゃんと綾ちゃんは席も隣、誰が見ても仲のいい２人だ。たまに、そんな４人が一緒に遊んでいるところを想像したりする。

・・・・・その４人が一緒に遊ぶとなったら・・・・・

多分、恋愛話が好きな理沙子ちゃんの事だから、話やすいたけちゃんには本音の気持ちを打ち明けているはずだ・・・・・・

「私・・・実は、のぶ君の事が好きなんだよね・・・」

それを聞いたたけちゃんは・・・・

「いいよ!!俺、のぶ君と仲いいから２人がうまくいくように何とかしてあげるよ!!」

理沙子ちゃんにのぶ君が好きだと打ち明けられた時、結局なにも出来なかった僕。そんな僕とは違うたけちゃんの積極的な行動力。そんなたけちゃんだから、絶対にのぶ君と理沙子ちゃんを２人きりにするうまいシチュエーションを作るはずだ。すると自然にたけちゃんは綾ちゃんと２人きり・・・・

（あ〜！！！！！くそ！！！！へんな想像ばかり浮かんでくる！！！たけちゃんはのぶ君だけじゃなくて僕の大好きな綾ちゃんまでとった！！）

僕には出来ない積極的な行動、上手なしゃべり・・・・・・・僕にないものをいっぱい持っているたけちゃん。考えれば考えるほどそのお調子者のたけちゃんが大嫌いになっていく。口も聞きたくないし顔も見たくない。近くにいるだけですごく腹が立つ！！

今の僕にとって、そんな仲のいい４人を目の前で見なければならない学校はすごく嫌いな場所になっていた。出来る事なら学校に行きたくないほどだ。だけど、一つだけ・・・・一箇所だけそんな学校でも大好きな場所がある。大好きな時間がある。僕は、毎日来るその時間だけを楽しみに、学校に通い続けた。

キーンコーンカーンコーン・・・・・・・

僕の大好きな時間、それがもうすぐやってくる。いらいらする僕を慰めてくれる大切な時間だ・・・・・・・

１６、図書室の恵美ちゃん

静かな教室・・・・・ものすごい数の本・・・・・・やっと僕の大好きな時間になってくれた。ここに来ると心を落ち着かせる事ができる。あの４人にも会わなくてすむし、ゆっくり自分の時間を楽しむ事ができる。でも、ここにいると逆に、あの４人が今何をしているのかがすごく気になってきたりもする。綾ちゃんはどんな顔をしているのか・・・たけちゃんはどんな風に綾ちゃんにからんでいるのか・・・・・僕と違って積極的なたけちゃんの行動・・・・・・またしてもいやな想像が頭の中に浮かんでくる。でも、そんな想像もさせないように、僕の心をやさしく包んでくれる女の子がいる。ここで必ず会える女の子・・・・・・

その子の名前は恵美ちゃん。今も僕の隣に座っている。

「どうしたの？清正君・・・・」

その恵美ちゃんが辛い顔をしている僕を見て、心配そうに声をかけてくれた。すごくやさしい恵美ちゃん。背が小さくてかわいらしくて・・・・そんな恵美ちゃんとのここでの時間は、今の僕にとって一番大切な時間なのだ。

「よっ！！きよちゃん！！待った？？？」

そこに、最近仲がいい僕のクラスの３人が声をかけてきた。その３人とは・・・・飯田君、山田君、五十嵐さんの３人だ。

あの４人が仲良くなってから、僕はいつも１人で教室にいる事が多かった。それに気付いた友達が少ない飯田君が、ここぞとばかりに

僕に話しかけてきた。その飯田君の親友の山田君。彼もその飯田君についてきて僕のそばにやってくる。そして僕の隣の席の五十嵐さん。彼女も席が近いので、僕達が話すその会話に入ってくる。これでこのメンバーが揃ったわけだ。

僕はそのメンバーがあまり好きじゃなかった。汚いでぶの飯田君。無口でやせの山田君。男っ気があって怖い不細工な五十嵐さん。正直言ってクラスでは、一番レベルが低いメンバーだ。それでもクラスで話し相手がいない僕は、そのメンバーと仲良くするしか手は残っていなかった。そんな嫌なメンバーからも離れてゆっくりできる時間、それがこの図書室の時間、恵美ちゃんとの時間だったのだ。

でもこの3人が、昼休みになるといなくなる僕を見て、最近この居場所を見つけてしまった。そして、今もまた僕と恵美ちゃんとの大切な時間に、割ってこの3人が入ってきた。しかも台詞は・・・「よっ!!きよちゃん!!待った???」だ。誰も待ってなんかいない。それでもそうとは言えない僕は・・・・

「あっ飯田君!!待ったよ・・・」

と話を合わせる答えしかできなかった。

いつもこの3人が来ると、恵美ちゃんはものすごく無口になる。それもそのはず、話の内容がまったく恵美ちゃん好みじゃないレベルの低い話ばかりだ。なんだか、一緒にいる恵美ちゃんに対してはずかしくなる友達・・・・・

（・・・・・僕はこんなやつらと友達じゃないよ・・・・・）

そう見せたい僕だけどそれができない僕は、このいやな空気を何と

か乗り切らないといけない辛い毎日を送り続けた。

17、プール開き

いつも通りの通学路。ずっと続いていた雨がやっとなくなって、朝のはずなのに暑すぎる太陽が元気に僕達を輝かせる。

もう7月になってしまった。まだのぶ君とは仲直りをしていない。まったく口を聞かない毎日。綾ちゃんもぜんぜん僕に興味がないみたいだ。そして相変わらずの飯田君、山田君、五十嵐さんと一緒の毎日。

（・・・・・・あ～あ・・・僕はやっぱりだめ男なんだ・・・・こんな友達としか一緒にいれないんだな・・・・・）

寂しい通学路を歩きながら、僕は思った。でも最近は、なんだかそんな友達が少しおもしろく感じてきていた。

いがいとおもしろい動きの得意な山田君。その山田君に突っ込む飯田君もまたおもしろい。「ほんとあなた達ってばかよね～！」と追い討ちをかけた突っ込みを言う五十嵐さんが、またいい味を出している。この3人、お笑いコンビでやっていけるんじゃないか？そんな事すら感じさせられた。

実は、このおもしろい3人組に慣れてきたのは僕だけじゃなかった。隣のクラスの恵美ちゃん、この子も最近はいい笑顔を見せてくれている。恵美ちゃんが喜んでくれるとなんだか僕もうれしくなってくる。やさしくてかわいい恵美ちゃん。この子が僕にとって今一番大切な友達なのだ。

それはそーと前を歩く2年生の女の子、今日は手荷物にプールバ

ックを持っている。僕と同じ持ち物だ。今までは、いつも雨にぬれるだけの邪魔な荷物。それが今では持ち物の中で一番大切な荷物へと変わった。

ミーンミーンミーンミーン

家のそばにある森で、めちゃくちゃ多いセミ達がうるさい声で鳴いていた。なんだか気持ちのいい夏を感じさせる。

今日の天気は晴れ、長い梅雨も一休みをしてくれたみたいだ。毎日毎日じめじめじめじめ雨ばっかり。ほんとにいやな6月だった。夏本番！と言える7月の今日は、ものすごく元気な太陽が僕の体を汗ばませた。

前を見ると、あの富士山が見える丘が見えてきた。

「うわ～みろよ！！すげーきれーだよ！！」

先頭ののぶ君が、僕よりも早くそのきれいな富士山を見てみんなに言った。

「うわ～ほんとだ！！すげ～！！」

みんなも驚くその景色。僕はそこで深呼吸、そして手荷物のプールバックをもう一度しっかり持ち直す。

（今日は僕が待ちに待ったプール開きの日だ。絶対に楽しい日にさせてやるぞ！！）

最近はずっといい事がない毎日を送っていた。きれいな富士山を見

た僕はなんだかいつになく、今日の成功を心に強く願った。

学校に着いた。朝の会も終わり、1時間目が始まる。今日のプールは4時間目だ。僕は楽しみにしているその時間を待ち続けた。なんだかいつもより長く感じる時間。楽しみにしていると時間が長く感じてしまう。そして・・・・・・やっと・・・・・やっとやってきたプールの時間！！

5分間休みになって、みんながどんどん水着に着替え始めた。興奮して行きたくても行けなかったトイレ。僕はみんなが着替える中、1人で我慢をしていたトイレに向かった。すっきりした僕が教室に戻ると、みんなはもうほとんど水着に着替え終わっていた。

（・・・・いそいで着替えないと・・・・・）

僕が着替え始めると、いつの間にか教室にはもう誰もいなくなってしまった。みんな、もうプールに向かったのだ。

（・・・・やっやばい・・・遅刻する・・・・・・）

焦る僕。すると、僕しかいない教室に1人の男子が入ってきた。その男子は何とのぶ君。のぶ君は何かを忘れてそれを取りに戻ってきたみたいだ。

「あっ・・・・・・」

僕を見て、のぶ君が一言つぶやいた。仲がよかった頃だったら・・・・・・「なにやってんだよ！きよちゃんまだ着替えていないの？」笑顔でそんな事を言ってくれたはずだ。でももう仲が悪い僕たちは、目も合わせず言葉もない気まずい雰囲気の教室で、それぞれの用事

を済ませる事しかできなかった。見るとのぶ君はスイムキャップを忘れてしまったみたいだ・・・・自分の机のあちこちを探しまわっている。気になった僕がのぶ君のロッカーを見てみると、そこにのぶ君のスイムキャップが見えた。・・・・迷う僕、のぶ君に探しているスイムキャップの場所を教えてあげるかどうか。

（・・・・ここでしゃべりかければ、もしかしたらまた仲直りできるかもしれない・・・・・）

悩んだ僕は、仲がよかったあの頃と変わらない、自然な言い方でのぶ君に話しかけてみた。

「のぶ君。スイムキャップがないの？？」

・・・・のぶ君はそれを聞いて、ちらっと冷たい目で僕を見る。そしてまたすぐに机のあちこちをいじりはじめた。・・・・・いやな空気だ。けれどものぶ君と仲直りがしたい僕は負けずに続けて言った。

「のぶ君！ロッカーにスイムキャップがあるよ！」

それにはのぶ君もしっかりと反応をした。びくっと体の動きを止めると背伸びをしながら、自分のロッカーに目を向ける。そして何も言わないでロッカーに行って、自分のスイムキャップを手に取った。そして僕とは目も合わせないでもちろんお礼も言わないで、急ぎ足で教室を出て行った。

（・・・・・あ～あ・・・・結局何にも話かけてくれなかったや・・・・）

こんないやな雰囲気を、あの腕相撲大会の日から今日までずっと続けている。こんないやな気まずい空気をずっとだ。

（もしかして、卒業までこの辛い関係が続くのかな・・・いや、中学や高校・・・・・大人になっても仲良くしてくれないかもしれない・・・）

それを思うと心の底から辛さがこみ上げてきた。

（またもう一度、僕にあの笑顔を見せてほしいな・・・・・）

そんな事を考えながらパンツ一枚になると、僕の荷物の中に腰巻バスタオルがないことに気がついた。ゴムのついたバスタオル。腰に巻いて下半身を隠しながら着替えるあの大切なプールの必需品、腰巻バスタオルがないのだ。

（・・・あ～どうしよう～！！バスタオル忘れちゃったよ！！どーやって着替えればいいんだよぉぉ！！）

それでも待ってくれない時間。どんどんどんどん時間は進む。しょうがないから腰巻バスタオルを使わずに着替えて、タオルを持たないままプールに向かった。

相変わらずセミが元気いっぱいに鳴いている。一週間しかない命。その一週間の夏をいっぱい楽しみながら、元気いっぱいに鳴いていた。太陽は暑すぎる。裸でいると体がじりじりじりじりいってくる。一年間で僕が一番好きな季節、夏だ！！そしてこの夏のプール。これがたまらない！！水に入って気持ちがいい時間。とうとうそのプール開きの日がやってきたのだ！！

僕は落ち始めていた気持ちをもう一度心の中で盛り上げ始めた。プールに入る前の準備体操が終わった。体操が終わると、プール担任の小島先生が・・・・・・

「さ～プールの準備はいい??まずはプールサイドに座ってバタ足から!!」

そう言って、今まで着ていた服を一気に脱ぎだした。脱いでビックリ、女子達が大声で叫びだした。

「きゃー!!なにあれ!!」

その先生の水着は見事なブーメランパンツ。しかも歳に似合わない蛍光色いっぱいのミニパンツだ。

「はっはっはっ!!みんな驚いたかな???」

・・・・・・ぜんぜん驚かさなくていい。なんでそんなパンツはくの?しかも体に自信があるわけでもない、中年のビールっ腹と毛だらけの足。はずかしい体を思いっきり出している。

（・・・・・・かっこ悪いな・・・・・・）

あまりにも情けないこの先生の姿。ある意味その度胸がすごいとも感じた。

気を取り直してプールに集中。みんなでバタ足をして壁の向こうまで行くみたいだ。肩まで水に入って準備ＯＫ。塩素の入ったプール独特の匂いを、鼻いっぱいに感じた。水面は太陽が反射してまぶしい。そんな中・・・

「ヨーイ・・・・」

遠くからの小島先生の声。スタートの合図だ。

「ドン！！！・・・・・・・・・って言ったらスタートだからね」

・・・・・・有名すぎる一発ギャグだ。気持ちよくその王道ギャグを先生が言った。変なタイミングで使ってしまったそのギャグ。気付かないでスタートをしてしまっている友達もいっぱいいた。その中の１人が壁の向こうについて両手を上げて・・・

「やった一番ン！！」

と元気に叫んでいる。あれれれ？よく見ると、あれはたけちゃん？その他の友達もまだスタートしていないことに気付かないで、勢いよく泳ぎ続けている。必死で泳いでいる子を止める先生。

「まだだよ！！まだスタートしていないよ！！」

そんな声はもう届かない。授業はめちゃくちゃだ。

耳まで水につけてスタートをする水泳。そこでそのギャグを使ってしまうと声も届かないし、目も見えない。間違えてスタートしてしまった人は、そのままゴールまで気付かないのは当たり前だ。そのギャグを使うなら陸上運動の時のほうがいいに決まっている。完璧な先生の初歩的なミス。おかげで誰が一番速いのかわからないまま、バタ足の練習は終わってしまった。

いろんな練習が終わって最後は自由時間。プールを全部使っていっ

ぱい遊ぶ。もぐって遊ぶ子。端から端まで泳ぐ子。追いかけっこをする子。友達につかまって遊ぶ子。いろんな遊びで楽しんでいる。

「はい！！終わりだよ～！！」

今日のプールで失敗ばかりをしてしまった小島先生が大きな声で叫んだ。その声を聞いて、みんなプールサイドに集まる。シャワーを浴びて・・・更衣室で着替えて・・・・楽しかったプールの時間もとうとうこれで終わり。そこで気がつく僕。

（・・・・あっそういえば腰巻バスタオルがないんだっけ・・・・）

みんなは、濡れた体をタオルで拭いている。僕にはそのタオルがないのだ。

（・・・・・どうしよう・・・・・）

僕が悩んでいると近くにいた飯田君が・・・・

「あれっ？きよちゃんバスタオルは？？」

と心配をして声をかけてくれた。それを聞いてうっかり顔で僕が答える。

「あっ・・・・・実は、忘れちゃったんだよね・・・・・」

すると笑顔の飯田君が・・・・

「な～んだ。それならそーと早く言ってくれればいいのに。僕のバ

スタオル貸してあげるよ！！はい！」

親切に貸してくれた飯田君のバスタオル。いつも汚いイメージがあるその飯田君。飯田君がもう拭き終わっているそのバスタオルは、なんだか少し汚らしく感じられた。でもいやとも言えないし、他に体を拭く方法もない。結局どうしようもない僕は、その汚い飯田君のバスタオルを使わせてもらった。

「あっ・・・・・ありがとう飯田君・・・・」

親友が変わってしまった僕の悲しいプールの結末。次は絶対にバスタオルを忘れないようにと心に誓った。

１８、いつもと違う昼休み

給食も終わって今は昼休み。楽しいはずの昼休みだけど、今日はいつもの昼休みとは違っていた。いつもなら、すぐに図書室へ一直線。気持ちがいい図書室で、静かにゆっくりとした時間を楽しむ。隣の席には僕の大好きな友達、恵美ちゃん。それが当たり前だった。でも今日はその図書室に行かないで、１人教室の自分席に座っていた。なんで??と言われたら答えは簡単。今日はその友達の恵美ちゃんが風邪でお休みだからだ。恵美ちゃんに会えない図書室は楽しみも半分。だから今日は教室に残ることにした。

僕が、ボーっと机に座っているといきなり教室のドアが荒々しく開けられた。驚いてそのドアを見ると、あわてて周りをきょろきょろしている飯田君がいる。いったいなにがあったんだろう・・・・

「きよちゃん!!きよちゃん大変だよ!!!」

僕のほうを見ながら叫ぶ飯田君。荒々しく開けられたドア、その理由にはどうやら僕もからんでいるみたいだ。周りにいた友達も興奮した飯田君を見て大注目をしている。そして、その飯田君が僕の席に近づくと、息を切らしながらこう言った。

「とっ・・・・隣のクラスの雄大君が・・・・・雄大君が・・・・・・」

（・・・・・・・・??雄大君!??）

隣のクラスの雄大君。体が大きくて力持ち、自分のいやな事があるとすぐにまわりの子を突き飛ばす、学校で一番有名な悪者だ。その

雄大君が、いったい僕にどんな用があるのだ??? ほとんど話もしたことがないって言うのに・・・

学校一の悪、雄大君。飯田君の口からこぼれた雄大君という言葉を聞いて、クラスのみんながどんどん僕に注目をしてきた。みんなが僕の席に集まり始める。

「ねーねー飯田君。雄大君がどーしたの!?」

近くの女子が好奇心いっぱいに言った。それを聞いた飯田君は、深呼吸をした後にゆっくりとおちつきを取り戻しながら話し始めた。

「実は・・・・」

飯田君の話だと、廊下を歩いている飯田君と山田君に、その雄大君が話しかけてきたらしい。その理由は、腕相撲。力では誰にも負けた事がない雄大君。もちろん隣のクラスでは、一番腕相撲が強かった。その雄大君が自分のクラスでは満足できずに、他のクラスの一番強い腕相撲の猛者をかたっぱしからやっつけているらしいのだ。そして、次の標的が僕のクラス。そこで目に付けたのが飯田君だったのだ。勝負と言われて断れるわけがない。それに、けんかでもなんでもない遊びの腕相撲。どうせやるなら勝ってやろう!そう思って飯田君はその雄大君に腕相撲を挑んだのだ。すると・・・・

「はんぱじゃないよ!!あの強さ!!!!簡単に遊ばれてやっつけられちゃったよ!!」

(・・・・・・この飯田君を簡単にやっつけた??)

僕はまだ1回も飯田君と腕相撲をしたことはなかった。だけど、あ

の伝説の腕相撲大会の時・・・・・飯田君はのぶ君と戦っていた。飯田君とのぶ君はほとんど互角。ぎりぎり勝てたのがのぶ君だった。そしてそののぶ君と対決をした僕。これもまた互角。何とか勝てたのが僕だ。単純に考えてみると、飯田君と僕もほとんど力の差はないはずだ。そんな飯田君を簡単に遊んでやっつけた??その雄大君ってどれだけ腕相撲が強いんだ!?そしてその後、飯田君が言った一言に、僕だけじゃなく教室に居たみんなが驚きおののいていった。そしてまたあの時と同じ、尊敬の眼で、みんなが僕を見始めた・・・・・

「きよちゃん!!僕が負けて雄大君が・・・お前のクラスはたいしたことないな・・・って言うから僕よりぜんぜん強い子がクラスにはいるよ!!って言っちゃったよ!!頼むよ、きよちゃん!雄大君をやっつけてよ!!」

（・・・えっ・・・・・????その「僕よりぜんぜん強い」ってもしかして僕のこと??そりゃそーだよな・・・・・一応クラスのトップの座は僕が持っているんだから・・・）

そして飯田君が最後に一言。

「今からこっちに来るって言ってるよ!!!」

（・・・・・うげぇぇぇぇ〜!!!今から!!??????）

僕は驚いた。見ると、周りに集まったクラスのみんなが、僕にものすごい期待の目を送っている。

（ちょ・・・・・・ちょっと待ってよ・・・この飯田君を簡単にやっつけたんだよ?いくら僕でも勝てるわけが・・・・・）

ガラガラガラッ！！

大きな音を立てて教室の入り口側にあるドアがゆっくりと動き出した。その奥には、ドアのてっぺんに頭が届くぐらいの大きな体。太った体はただのデブじゃない、筋肉でいっぱいだ。Ｔシャツがはちきれそうなくらい体をピチピチに張っている。隣のクラスの雄大君がその姿を現した。

１９、学校一の腕相撲王者

「白川　清正ってやつはどいつだ！！！」

・・・・・完全に雄大君の目的は僕だけだ。恐ろしく迫力ある雄大君。僕は深呼吸をした。そして、ゆっくり静かに目を閉じた。

目を閉じながらあの時の腕相撲大会をしっかりと思い出した・・・

あの時、僕には自信があった。誰にも負けない自信。得意なものが少ない僕。それでも腕相撲だけは誰にも負けない自信があった。僕の一番の特技がその腕相撲だからだ。今、目の前には学校一の腕相撲王者が立っている。今の僕はクラスで一番の男、まだその王者に挑戦した事はない。

（・・・・どうせやるなら・・・・）

なんとかその王者に勝つ方法を考えた。といっても普通に勝負をしてしまったら・・・・・・勝ち負けは目に見えている。頭の悪い僕。

（どうしたらこの雄大君に勝つ事ができるんだ・・・・？）

ない頭を使って必死に考えた。　　ズシッズシッ　　っと

僕にその雄大君が近づいてくる。

（もう時間がない考えろ僕！！なんとか雄大君に勝つ方法を！！みんなが期待しているじゃないか！！ここで負けたら僕の立場がなくなっちゃうよ！！）

パニックで焦る僕。考え考え考えて・・・・・ふっ・・・・と僕は落ち着きを取り戻した。やっと、この雄大君に勝つ方法が見つかったのだ。にやっ・・・・と笑みを浮かべて、スー・・・・ッと静かに立ち上がった。そして僕は自信たっぷりに雄大君を指差し、こう答えた。

「雄大君！僕が清正だよ！！」

堂々とした僕の態度を見て、不思議そうに雄大君が言った。

「なんだ！お前か！やけに自信たっぷりじゃないか！！よっぽど腕相撲に自信があるみたいだな・・・・・その自信をすぐにへし折ってやるから、今すぐ俺と勝負しろ！！」

すぐに僕は余裕の笑顔で答えた。

「いいよ雄大君！勝負だ！！」

周りの友達みんなが目を丸くして驚いた。あせらないで冷静にその雄大君との勝負に挑む僕を見て・・・・

（・・・・・なんでそんなに自信があるの？？？・・・・・・・・）

みんなそう思っているはずだ。それは雄大君に勝てる方法が見つかったからだ。僕が見つけた雄大君に勝つ方法。それは・・・・・

ドンッ　と僕は片手を机に置いてこう答えた。

「さあ、雄大君！僕と勝負だ！！」

それを見て、教室のみんな全員が驚いた。自信たっぷりの僕を見て驚いたわけじゃない、その出した片手を見て驚いたのだ。勝負を挑んだ雄大君も、それを見て目を丸くさせている。僕が出したその腕・・・その腕は・・・・・・・・・・・・・なんと左腕だったのだ！！

実は僕は左利き。ボールを投げるのも左。野球のバットも左。力を入れる事をする時は、全部左腕を使っていたのだ。でも、なぜか不思議で、字を書いたりご飯を食べたりする時は右利き。そんな、ちょっと変わった利き腕をしていた。でも絶対に腕相撲は左のほうが強い。体重も乗せやすいし、力も入れやすい。そんな僕が考えた、腕相撲で勝つ方法・・・・それが左手を使うということだったのだ。左腕を出す僕を見ながら答える雄大君。

「ちょっ・・・・ちょっと待てよ清正！なんで左手なんだよ！！普通は右手で勝負だろ！！」

それを聞いて、みんなもその通りという不信感の顔で一斉に僕を見る。それでもあわてないで僕はすぐに答えた。

「あっ・・・・・ごめん雄大君。僕さっきのプールで右手ぶつけちゃったんだよね・・・だから、ぜんぜん右手だと力入んないし・・・今日は左手にしてくれる？？」

右手が得意だけど怪我をしている。そんな風に思わせるうそを僕は言った。それを聞いてみんなも納得。みんな大きく顔の向きを変えて今度は逆に雄大君に注目。雄大君の次の台詞を待つ。

「し・・・・しかたないな・・・・・・・」

そんなみんなの目線を気にしながら雄大君もしぶしぶ左手を出した。全部が僕の計算通りになった。さあ、勝負の開始だ！！

「レディー・・・・・・ゴー！！」

飯田君の合図。勝負が始まった。

「ふん！！！！！」

雄大君パワーが僕に襲いかかる・・・・こらえる僕。その雄大君の強さをびしびし感じながら僕は思った。

（・・・・・・左手でこの強さ！！？？・・・・・・・）

驚きの焦り。さすがに左手なら圧勝が当たり前だと思っていた。だけど、この雄大君は間違いなく僕と同じくらいの力を持っている。左利きの僕と同じくらいの力を持っているのだ。雄大君はまったく苦手な左手。それなのにここまでいい勝負になってしまうということは、もし右手の勝負だったとしたら・・・・・・僕は左手で勝負に挑んで本当に良かったと思った。それでもさすがに僕の得意な左手。やっぱり勝ち負けは決まっていた。僕がじりじりとその雄大君を追い詰め始める。

「くっ・・・・・・くぅぅぅ・・・・・！」

苦しむ雄大君。粘りを見せる雄大君だったけど、一気にその決着がつけた。

・・・・・・ドンッ！！！

見事な僕の勝利。

「うおぉぉぉぉ！！すげーよ！！きよちゃん！！」

みんなが叫ぶ。そして負けた雄大君が僕に文句を言いたそうな悔しい表情を作る。「右手じゃないと本当の勝負じゃねぇだろ！！必ず今度は、ちゃんと右手で勝負しろよ！！」そんな事を言いたかったんだと思う。だけど、それを言うより先に僕が笑顔で答えた。

「いやいや勝ったけど右手じゃないからね～・・・今度、僕の右手が治ったらまた本当の勝負をしてよ！雄大君！！」

・・・・・本当は右手で勝負をしたかったというふりを積極的に見せる僕。それでも雄大君に勝ったという伝説は、この小学校では有名になった。絶対に負けてしまう右手での勝負。

（・・・もしまた雄大君が僕に挑戦してきたら、今度はばれないように逃げよう・・・）

そんな事を思いながら、勝負の昼休みを終わらせた。

20、恵美ちゃんの家

また腕相撲大会の時みたいに、クラスの注目を集める事ができた僕。「きよ君は、腕相撲が学校一強い」そんなかっこいいイメージを作ることができた。なんだか最近はいい事がなかったから、今日はすごく気持ちがいい一日になった。そんな学校ももう終わって、今は帰り道。でも今日は、なぜか自分の家とは反対の方向に向かって歩いていた。なぜかというとそれは・・・・・

帰りの会が終わった後、隣のクラスの恵美ちゃんの友達が、僕に連絡ノートを持ってきていた。

「ねーねー清正君。悪いんだけど恵美ちゃんちに連絡ノート届けてくれない??」

学校を休んでしまった恵美ちゃん。その恵美ちゃんに連絡ノートを届けてほしいと言っているのだ。その子が恵美ちゃんの家から一番近くて、ノートを届けるには一番の隣近所だった。だけどその子は、学校の行事で夕方遅くまで学校に残らないといけないらしい。遅くなると恵美ちゃんのお母さんが心配するから・・・・ということでいつも仲がいい僕に、その連絡ノートをお願いしに来たのだ。

（どうせ僕ものぶ君と仲が悪くなってから1人で帰る寂しい下校の毎日だったし・・・・別にいいかな・・・・・・・）

そう思った僕は、そのお願いを引き受けることにした。

それにしても何で僕が恵美ちゃんと仲がいいって事を知っているんだろう?確かに仲はいいけどそれは図書室での話。その図書室じゃ

ない場所では、ほとんど仲がいいところを見せた事はなかった。不思議に思いながら、僕はその連絡ノートを受け取った。

そんな訳で、今日は家とは反対の校門から恵美ちゃんの家を目指している。恵美ちゃんの家に行くのは今日が初めて、というよりも女の子の家に行くのが初めてだった。なんだか少しはずかしい。はずかしいけどちょっとうれしい。僕はそんな不思議な気持ちで恵美ちゃんの家を目指した。

数十分歩くとすぐに恵美ちゃんの家に着いた。どこにでもある普通の2階建ての家だ。

ピーンポーン・・・・・・・ピーンポーン・・・・・・・・・緊張しながら家のチャイムを鳴らす。

「はーいどちらさま??」

恵美ちゃんのお母さんがドアを開けながら、尋ねてきた。

「あっ・・・・・あの恵美ちゃんの連絡ノートを届けにきたんですけど・・・・」

テレながら僕が答える。それを聞いたお母さんは・・・・

「あ〜らあら・・てっきり友子ちゃんが届けに来ると思っていたのに・・・ごめんね男の子で少しビックリしちゃった。あっ・・・・・恵美は2階にいるから早く上がって行って・・・」

（・・・・・・上がる??）

想像していなかったその言葉に僕は驚いた。家に上がるなんて事まで考えてはいなかった。もちろん、女の子の部屋には少し興味がある。しかもそれが恵美ちゃんの部屋だとしたら、どれだけ女の子らしい部屋なのかすごく見てみたい。でも一対一で恵美ちゃんと会うのは少しはずかしいし・・・・

（・・・・あれあれ！！??おかしいな・・・・・・僕の好きな子は綾ちゃんのはずなのに、なぜか恵美ちゃんをすごく意識し始めてる・・・・・・・もちろん仲がよくてかわいらしい恵美ちゃんも嫌いなわけじゃない・・・だけど友達のはずじゃないか！）

友達の恵美ちゃんを変に意識をしている僕。2人っきりで会うのをはずかしがっている場合じゃない。普通に体の具合を見てあげればいいんだ。僕は少しはずかしがりながらも、家に上がらせてもらう事にした。

自分の家じゃない家にくると、なんだかすごく緊張をしてくる。そしてその家にしかない独特の匂いを感じたりする。この恵美ちゃんの家も僕の家とは違う独特の匂いがした。階段を上がり、上まで行くとすぐ左手にコルクボードで「恵美」と書かれた部屋があった。すごくどきどきしてきた。でもここまできて、入らないわけにも行かない。僕はそのドアをノックして静かに開けた。

「恵美ちゃん・・・・・・大丈夫??」

ベットに横になっていた恵美ちゃんが僕を見て驚く。

「あっ・・・・・きっ清正君?・・・・・・・・・びっくりした・・・・・どうしたの！！??」

いきなりの僕の登場にはさすがにあわてるはず。驚かせないように、どうしてこうなったのかを説明した。すると恵美ちゃんは・・・

「そーだったんだ・・・ありがとね・・清正君」

なんとか落ち着きを取り戻してくれたみたいだ。それを見て僕も一安心。僕のどきどきもなくなってきたので、今まで緊張で見る事ができなかったその部屋をゆっくり横目で見渡してみた。

女の子の部屋、生まれて初めてみる。この恵美ちゃんの部屋は、僕が想像していた「ピンク一色」みたいな女の子らしい部屋とは違うみたいだ。なんだかかわいらしさよりも清潔感が目立つきれいな部屋。本棚にきちんと整理整頓されている本。いつでも勉強ができるように、無駄な物を置いていない清潔な机。恵美ちゃんが横になっているベットもすごく落ち着きがあるきれいなベットだ。なんだかその片付けられたきれいな空間が、また緊張感を高まらせた。

はじめは少しギクシャクした会話だったのかもしれない。でもだんだんと慣れてきた2人は、いつもの学校と変わらない仲がいい2人になっていた。

（・・・・・・恵美ちゃんっていい子だな・・・・・・）

優しい恵美ちゃんを目の前に心の中でそんな事を思った。恵美ちゃんは僕の話す話をすごく楽しそうに聞いてくれる。その話に合わせてくれるというよりも、その話に必ず興味を持ってくれる。そんな恵美ちゃんと、僕は時間も忘れていろんな話をした。恵美ちゃんのお母さんが気を使ってお菓子とジュースを持ってきてくれた。自分の家で食べるお菓子とはまた違う種類のお菓子、家の違いを感じる。夢中になって話をしていると、外の明かりの色が変わり始めている。

気になってよく外を見てみると、もう昼の太陽が夕方の夕日に変わっていた。そういえば、僕はまだ学校から家に帰っていない。ここから家まで多分３０分はかかると思う。お母さんも少し心配しているかな・・・・・・恵美ちゃんとの楽しい時間だったけど、時間も遅くなってきたから今日はこれぐらいにして帰ることにした。

「もう時間も遅いし・・・そろそろ帰ろうかなぁ・・・・・・」

僕が言うと、恵美ちゃんが少し寂しそうな顔で答えた。

「あっ・・・・・もう帰るの？・・・・・・そっか・・・・・・もう夕方近いもんね・・・・じゃあまた明日だね！・・・・・」

そんな恵美ちゃんを見て僕は思った。

（・・・・・・恵美ちゃん・・・・・もしかして僕のことが好きなのかな・・・・）

実は、今まで少しずつ感じていた恵美ちゃんの友達以上という僕への態度。それを感じながらも僕は

（そんなわけない！！勘違いだ！！）

と心で叫んでいた。それでも実際は僕自身も、少しずつ恵美ちゃんに対しての恋愛感情が芽生え始めている。だけど

（・・・・僕には綾ちゃんがいる・・・・・綾ちゃんがいる・・・・・・）

と心の中で言い続けて、いつもその感情を抑えている僕がいたのだ。でも綾ちゃんは僕からどんどん遠ざかっていく、絶対に僕の事なんか好きでもなんでもないはずだ・・・・恵美ちゃんはいつも僕と一緒にいてくれる。仲良くしてくれる。それに僕に興味を持ってくれている。今みたいに恵美ちゃんから僕に対する恋愛感情を見せられ

ると、僕はいつも2人を天秤にかけてしまいそうでものすごくいやな気持ちになった。それを思った僕は、頭を横に大きく振った。そして恵美ちゃんを見て笑顔で言った。

「うん！！絶対元気になってね！！明日学校で待ってるね！！」

それを伝えるとすぐに部屋を出ると恵美ちゃんのお母さんに挨拶をして家を出て行った。

夕日の中・・・・・・歩きながら深呼吸。

「・・・・・・・・・・ふ～・・・・・・・・・」

（・・・僕が好きな子は綾ちゃんだ・・・綾ちゃんだ・・・）

歩くリズムに合わせて心で言い続けた。気付くと場所は学校の近く。そのまま心で唱えながらリズムに合わせて歩き続けていると、今日僕に恵美ちゃんの連絡ノートを持ってきてくれた友子ちゃんが学校から出てくるのが見えた。

「・・・・・・あれ？？？」

僕が言うと、友子ちゃんも僕に気付いて声をかけてきた。

「あっ・・・清正君！！今帰り？」

学校ではあまり話さないその子。話しづらさがあったので、その返事を簡単な言葉で返した。

「あ・・・うん。そうだよ・・・・」

すると友子ちゃんは興味心身な笑顔に変えて、僕に早口で尋ねてきた。

「恵美ちゃんどーだった???元気そうだった??清正君が来てくれてすごく喜んでたでしょ?」

質問が多すぎて何がなんだか訳がわからない僕はすぐに・・・・

「う・・・・うん。うん。・・・・・」

と相づちみたいな返事だけを繰り返した。

「よかったぁぁぁ・・・・やっぱり清正君に頼んでよかったよ・・・・・ありがとね!!また明日!!」

それを僕に伝えると、元気なスキップで友子ちゃんは帰って行った。

（・・・・・・・??・・・・・・・・・）

そんな友子ちゃんの行動がまったく意味不明な僕は、そのまま家を目指して首をかしげながら歩き始めた。歩きながらさっき友子ちゃんが言った早口な台詞をもう一度ゆっくり思い出す・・・・・・

「清正君が来てすごく喜んでたでしょ・・・・・・」「やっぱり清正君に頼んでよかったよ・・・・・」

・・・・・・・・・この言葉の意味はいったい何だったんだ?落ち着いてその意味を考えてみると、なんだか友子ちゃんが「恵美ちゃんは清正君の事を好き」だというのを、言い方を変えて言っている

ように感じた。考えすぎなのかもしれない。だけど、ほとんど話した事がない友子ちゃんが、わざわざ僕に連絡ノートを頼む理由もわからないし・・・・綾ちゃんの事が好きな僕は、なぜだかうれしいような・・・・・・辛いような・・・・・・悪いことをしているような・・・・・・意味がわからない気持ちになっていた。

夕日が沈みかける中、複雑な気持ちで歩き続ける。

（僕はいったいどうしたらいいんだろう・・・・・）

別に恵美ちゃんに告白をされたわけじゃない。それなのに悩んでいる僕。夕日を見てまた大きく深呼吸をした。

（何を考えているんだ僕は！！明日も今までどおりにいこう！！）

友達の恵美ちゃん。大好きな綾ちゃん。今までの自分勝手な想像を振り払って、僕はもう一度その変わらない関係を想いながら、家を目指した。

21、伝説の虹

富士山が見える丘についた。夕方に近いこの時間、その丘は夕日の色に染まったきれいな丘へと変わっていた。

のぶ君と仲が良かった頃、僕はここで毎日のぶ君と遊んでいた。丘を登ったり・・・沼で遊んだり・・・秘密基地を作ったり・・・時間も忘れていろんな遊びをしていた。そして、気付くとそののぶ君がオレンジ色に変わっていた。夕日・・・・僕にとってここ、富士山が見える丘での夕日は、のぶ君との大切な思い出なのだ。

（あ～あ・・・・・また・・・・・・・あの夕日に染まったのぶ君を見てみたいな・・・・・）

僕は懐かしい気持ちで、一緒に遊んでいた頃ののぶ君の姿を思い出した。

富士山が見える一番の特等席、ガードレールの裏。丘と道を分けるガードレールの丘側だ。危険なその場所だけど、夕方はいつものぶ君とそこに座って夕日と富士山を眺めていた。また懐かしくなって僕がそこに目を向けると、その危険な場所に1人の女の子がカメラを持って座っているのが見えた。

（女の子が1人で？危ないよ・・・・）

一歩間違えれば丘から転落して怪我をしてしまう。そんな危険なガードレールの裏に1人でいる女の子。その不自然さを不思議に思いながら近づくと、その子が僕の知っている女の子だということに気がついた。僕は迷わずその女の子に話しかける。

「・・・なにしてるの??危ないよ!!理沙子ちゃん!!」

そこに座っていた女の子、その子は僕と同じクラスの理沙子ちゃんだった。

「・・・あっ・・・きよ君!!な～に??今帰り??」

そう聞かれた僕は、帰りが遅くなった理由を理沙子ちゃんに話した。すると理沙子ちゃんは・・・

「へーそれでこんなに遅くなっちゃったんだ。大変だったね・・・・」

それを聞いて、今度は僕がその意味がわからない行動をしている理沙子ちゃんに質問をする。

「理沙子ちゃんはカメラなんか持って、そんな所でいったい何してるの??」

「え～・・・・何をしてるって・・・・見えないかな～って思ってさ・・・・」

（・・・・・・??見えないかな?いったい何が??）

不思議に思った僕が、その丘の先を見てみた。するとそこには、オレンジ色に染まったきれいな富士山がはっきりと見えていた。それを見て僕が答える。

「えっ・・・・見えてるじゃん。きれいに!!」

僕の言葉を聞いて、理沙子ちゃんが驚き焦りながら僕に言った。

「えっ！！！どこどこどこどこ？？？どこよきよ君！！」

（・・・・何をそんなにあわてているんだ？？？）

僕はゆっくりあわてずに教えてあげた。

「何言ってんの？目の前だよ！ほらきれいな富士山が見えてるでしょ！！」

そう言うと、理沙子ちゃんはがっくり肩を落として答えた。

「・・はぁぁ～？？ふ　じ　さ　ん　？？何が富士山よ！！私が言っているのは富士山のことなんかじゃないわよ！！」

（・・・えっ富士山じゃないの？？それ以外にここから何が見えるって言うんだ？？見えるのは住宅街だけじゃないか！）

不思議に思った僕は、もう一度理沙子ちゃんに聞いてみた。

「富士山じゃないの？？じゃぁいったい何が見えるって言うのさ！」

それを聞いた理沙子ちゃんが答える。

「・・・・・虹よ！！虹！！！！虹に決まってるじゃない！！」

（・・・・・・・・？？？虹？？ここから虹が見えるのか？？）

通学路のこの道、しかも学校が終わった後も、僕はのぶ君といつもこの富士山が見える丘で遊んでいた。その僕が言う。僕はここで一度も虹を見た事がない。なのに理沙子ちゃんはわざわざガードレールの奥の危険な場所まで行って、そこに座りながらその現れるはずがない虹を探していたのだ。しかも聞くと「・・・虹に決まってるじゃない！！」とまで言われてしまった。意味がわからないので詳しい話を聞いてみた。そしてそれに答える理沙子ちゃん。

「・・・・えっ？？？きよ君知らないの？ここの伝説！！・・・・それなら教えてあげるわよ！！実はね・・・・・」

その話によると・・・

僕達にとって、この丘の名前は「富士山が見える丘」だった。だけど、ある人達にとっては、ここが「虹が見える丘」と名づけられているみたいだ。でも、さっきも言った通り、これだけここに来ている僕でもまったく見た事がないその虹。なんでそんな名前が？？と思うはず。その答えは、「虹が見える」と言うのは伝説。そして、ここでその虹を見て、その虹をカメラに収める事ができれば、願い事が１つ叶うと言う噂になっているらしいのだ。それで、理沙子ちゃんはカメラを持って、わざわざこんなところにいたわけだ。

そういう話が大好きな女子達。いったい何を考えているんだろう。正直言って、僕はそのうそで固められた伝説がめちゃくちゃバカらしく思えた。それでもそんな事は理沙子ちゃんには言えない、当たり前だ。しょうがなく、信じていないその話だったけど話をあわせてその理沙子ちゃんに聞いてあげるのだった。

「・・・・へ～そーなんだ・・・で、いったい理沙子ちゃんはどんなお願いをするの？？」

すると理沙子ちゃんがものすごい笑顔で答えた。

「そんなの当たり前じゃない！！・・・・のぶ君とうまくいきますように！！・・・・よ！」

予想通りの答えが返ってきた。相変わらずのぶ君が大好きな理沙子ちゃん。こんな事までやるなんて、本当に言葉が出ない。そして、その理沙子ちゃんに投げやり気味な最後の一言を言って、僕は家に戻る事にした。

「そっか、・・・・・大変だね！！見えるといいね虹！じゃ！理沙子ちゃん頑張ってね！！」

（なにが伝説だよ！！虹なんてなかなか見えるもんじゃないって。そんな伝説に頼るんだったら自分から告白をしちゃえばいいのに・・・・）

僕はそのくだらない伝説を信じている理沙子ちゃんが、なんだかあほらしく思えた。

22、夏休み前、最後の日

ついに・・・・・ついに明日から夏休みだ！！！！！学校生活で一番楽しいその夏休み！それを目の前にして、うれしい気持ちが表情や態度にまで素直に出まくってしまった。

「おはよ！！山田君！」

いつもは僕からはあまり話しかけない山田君。気持ちが上がりすぎてる僕は、ありえないほど元気に声をかけた。

「あっ・・・・・・おっおはよ・・・・・」

山田君が静かに、ボソッとつぶやいた。

みんなが待ちに待った夏休み！！今日で学校が終わりだ！！授業も午前中で終わり、ランドセルも必要ない、手下げ袋だけでいいのだ！！・・・・・・・・それなのに・・・・・・・・なぜか僕のロッカーには大きなランドセルが入っていた。なぜかと言うと、楽しい夏休み前でも、僕には最後の大仕事が残っていたからだ。それは・・・・

・・・・荷物整理・・・・

僕はいつも荷物を整理するのがめんどくさいので、学校が終わる最後の日に、その荷物全部を持ち帰る癖がついていた。みんなは計画的に夏休みの一週間ぐらい前から、こまめに荷物を持って帰っている。でも僕の机の中には、まだものすごい数の荷物がいっぱい詰まっている。この夏休み前の最終日、それは毎年やってくる僕の挑戦

の日だ。ものすごい数の荷物たちを僕は1人で家まで持って帰る。２０分はかかる下校道。今日もその挑戦に意気込みながらその準備を始めた。

荷物をまとめようと机の中をいじっていると、ものすごい物が机の中に入っているのに気がついた。それは・・・・・・給食のパン。しかも大好きなあげパンだ。その小さなビニール袋に入ったあげパンの中を見てみると・・・・無残にもカビだらけ。その袋を開けてビックリ、めちゃくちゃくさい匂いでぷんぷんだ。

「なんかさ～・・・・・最近きよ君の机くさくない??」

思いだす・・・・・・・隣の席の五十嵐さんが、よく僕に言っていた台詞・・・・・・

（何言ってんだ・・・・・・・まさか僕の机がくさいわけないじゃないか・・・・飯田君の机じゃあるまいし・・・・）

そう思っていた僕だけど、本当にくさかったらしい。そのくさい犯人がこのあげパンだ。記憶をたどっていくと・・・・・・そうだあの日の給食・・・・あげパンジャンケンをしたその日だ。理沙子ちゃんにもらったあげパン。食べきれなかった僕は、そのパンを机の中にしまっていた。もうずいぶん前の話だ。その理沙子ちゃんにもらったあげパンが、この変わり果てたカビだらけのパンなのだ。

（・・・・・・どっ・・・・・どうしよう・・・・みんなにばれたらバカにされるよ・・・みんなにばれないようにゴミ箱に捨てないと・・・・・）

はずかしい僕はそのパンをばれないようにおなかのＴシャツの中に

しまった。そして横目でゴミ箱に目を向ける。ゴミ箱までの距離は数メートル、障害物もまったくない。よしっと心でうなずき、そのごみ箱に向かってこそこそこそこそと早歩きで近づく・・・・・だんだんと近くなるゴミ箱。

（もう少し・・・・・後少しだ・・・・・）

と思ったその時、そこでたけちゃんがゴミ箱と僕の間に割って入ってきた。

「あれ～きよちゃんどーしたの～こそこそこそこそと・・・（笑）な～ぁにぃ～かなぁっ！！♪」

大嫌いなたけちゃんが、ものすごくむかつく顔で僕に話しかけてきた。何も知らないくせに何かを知っているような嫌な顔だ。

（くっくそ！！たけちゃんめ！！後一歩のところだったのに！！！なんでこのタイミングで僕に話しかけて来るんだよ！！）

たけちゃんは、いつもいやなタイミングで僕に話しかけてくる。そんなたけちゃんを細めで見ながら・・・・・

「なっなんでもないよ・・・・・べつに」

と僕が答えると、おなかを隠す僕を見て、手を出しながらたけちゃんがこう言った。

「あれれれれぇ～なぁ～にを隠しているのかなぁぁ？！♪」

そしておなかに置いている僕の手を、大きく払いのけた・・・・・

・・ボトッ・・・・・・・・落ちてしまったカビだらけのパン。

「なっ・・・・・・なんだよこれ！！！あげパンじゃねーの！！しかもカビだらけだよ！！きったねー！！」

たけちゃんが、いつもよりぜんぜん大きな声でみんなに向かって叫んだ。

「うわ～なにあれ・・・最悪・・・・」

いろんな友達がその腐ったあげパンと僕を見て、いやな言葉を漏らした。・・・・遠くで大好きな綾ちゃんも僕のほうを見ている。避難訓練の時は、あれだけ大接近をしていた綾ちゃん・・・・なのに今ではめちゃくちゃ遠い存在だ・・・・・避難訓練が終わってから、僕は綾ちゃんとまともに話をした事がない。そんな綾ちゃんとの溝をまたしても大きく広げてしまうはずかしい僕の姿。大きなため息をついた。結局、最後の最後まで僕は綾ちゃんに情けない姿をさらけ出す事となった。

終業式が終わって・・・・先生の話が終わって・・・・・早くもその下校の時間になった。気を取り直してもう一度その勝負に集中する。夏休み前の最後の大仕事。長い長い下校の始まりだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0627y/

思い出が見える丘

2011年12月11日08時46分発行